常山紀談

卷之五六

183
合5
279

東京圖書館

和書門	雜史類	二八函	五架	二七九號	一冊

常山紀談卷之五目次

一勝頼の首穿鑿れ事
一秀吉勝頼れ滅亡と惜れし事
一信玄の館の跡と信長公見たまいし事
一勝頼天目山にて最後の事
一禪僧廣嚴院勝頼の屍と葬る事
一信忠妻林寺と燒るゝ事
一東照宮依田信蕃と助けたまふ事
一武田信綱誅戮の事
一戸田半右衛門山口小弁佐々清蔵功名れ事
一小山田信茂誅戮れ事
一馬場美濃が女召出さるゝ事
一辻彌兵衛が事

一明智光秀信長公を弑する事
一秀吉備中より光秀が書を取れし事
一秀吉西國に米を買れし事
一光秀居城を築く事　附辛崎の松の事
一森蘭丸才敏の事
一光秀反狀に事
一秀吉浮田を欺きて上洛の事
一黑田孝隆思慮の事
一池田家に使者筒井順慶を試る事
一明智秀俊湖水を渡りて坂本城に入る事
一東照宮和泉國堺より御歸國の事
一小寺黑田始末に事
一井口兄弟武勇の事

一吉田六之助首供養の事
一生田木屋之介武功の事
一備前國福岡城合戰福井小治郎歌を遺して討死の事
一再福岡合戰藥師寺頓田片岡三士討死の事

常山紀談卷之五

備前國　湯濃新兵衛元禎輯錄

○勝頼天目山ゟ落行と云瀧川一益攻入て落人とも討とり勝頼は首と取たれども誰といふ事と云らす小溝の中ゟ樂けるゟ百姓ばら溝の前にて必平伏し禮として打通るいかなる故ぞと問はあの溝れ中に屋形の御首のおいしましといふさふばとて首どもとり出す信忠勝頼の首とわゝち置先瀧川義大夫と呼て汝が取たる首いつれぞと問るゝゟ是なりとて出そ此い土屋總藏昌惟が首也伊東伊右衛門といふ者そゝみ出て勝頼の首と見て此おろ伊右衛門が取たると申そ證いかゟと問るゝゟ斬口ゟ乘たる馬の栗毛かそ毛の血ゟまじりてつきてい天目山の麓田野より鞍の四方出に付し故なりと申そ果して詞ゟたがいす依て伊東がとりたるゟ定りぬ信長勝頼の首と見ていかゟ汝が父非義不道なりし故天の罰のがきがたく今かくなりぬ信玄一度京ゟ越ん

と志しけると聞汝が道と京おおくり女童に見去ふれよと罵り道と東照宮の御もとよれくられけり　東照宮御將机においしませしが勝頼の道と聞去召將机とかりさせたまひ偏ふ若きゆゑ思慮なくかくなふせいと禮義正しく仰ゐり是と傳へたく甲斐信濃の士ども德川家ふ心とよせ奉るもとくなれり

又一說ふ勝頼の道と瀧川か士瀧川莊左衛門といふ使番に持せて信長に見せ申せばさま〳〵ふ罵て杖ふて二ッりき後足ふて蹴られけるを莊左衛門是とかゝる事こそなけれ織田家の運命はや尽はてなんといひゝると蜂須賀阿波守至鎮の長臣稻田修理が弟丹波瀧川が方ふ信長より置れたるが聞ゝるが果去て程なく信長弑せふれ去らば莊左衛門心ゐる者よとて蜂須賀の家より搜求ゝるふ瀧川の家滅て後かくれ居たると召出して仕へけると也

○信長甲州に攻入れし頃秀吉い筑前守とて西國毛利家に向て甲州の軍ふ從いず勝頼死して甲州平均なりといふと聞秀吉大息りいてゐたふ人と殺したる事の殘り多さふ我軍中ふゐるあらば去ひて諫先申て勝頼ふ甲信二州をわたゐて關東の先陣と去たらんふ東國い平れーふすべきふとくりゝゐーー悔れけり

○勝頼亡て後信長信玄の館と見んとて馬と乘入んとせられーふ馬進まざり去かば引退されけり　東照宮い程經て甲州と治先させたまふ時信玄の館れ跡御覽の時館の門外ふて御馬よりおりさせたまひーとぞ

○勝頼滅亡天目山ふての事ども甲陽軍鑑ふい切死に沒せふれし由れせたり甲州の士民のいひ傳ふるとい異なり鶴瀬も勝頼ふ背しかば天目山をさして落ゆられしふ一揆所々より起りてゝれば百姓の家ふ從ひし婦人どもをいれ旁の人家に茅の有けると運ばせて出入る口と跡さがせ火とりけふれけり小高き所ふ上りて武田の家代々持りたゐふれー楯無といゐる物の具と信勝に着さ去めらる土屋總藏肩入の役と

之々りさて勝頼薙刀と横たへ寄くる一揆よ向いれーと總藏屋形い新羅三郎より二十八代弓箭の家とつがせたまひ今いの死ばよ及ばせたまふとも一揆ばらよ御首とわたし申さん事口惜くいと諫けをば尤なりとて物の具ぬぎ總藏よ介錯せさせて終ふをしとぞ相從へる人々皆互よ刺ちがへて勝頼の供ーけり總藏と僧の麟岳と殘りとゞまれるがそな事よく終りしを見とゃけて後總藏自害ーければ麟岳刀と口にくいへ貫られて死しけると也さるをば後甲陽軍鑑天目山の事い元より彈正の筆記ゐ非ず後の人誤り傳へて書たるなるべし

○勝頼父子の屍田野ゐ捨れども信長と恐れて慧林寺の僧と始とーて歛る人なし田野の西北四里ばかりよ中山といふ所の洞家の禪僧廣嚴院來りて勝頼夫婦信勝已下の屍ととさ先葬る其後　東照宮甲州と御をさ先一寺と建立有て景德院と號し田地と寄附ゐり小宮山内膳友信が弟の僧ありしと住持の僧となしたまゐり

○勝頼亡てのち武田家尊崇ゑ々る慧林寺に前將軍義昭公の使大和淡路守三井寺の上福院佐々木承禎三人ゥくーー置たる聞えありけをば早く出すべきと信忠下知せらるゝ事三度よ及べども出さず信忠怒て累世の旦越勝頼とば少の間も境内よ止めず其遺骨とだよとり歛ずして詮なき者とゐくしたるとて津田次郎信治長谷川與次郎等と云て寺とりまいてさがさるゝよ三人いとく逃さりぬ僧徒みな山門の樓よれほりてゐもりたるとと其下に燒草と積て火とかけたれば快川を始と云て坐して合掌して焚死そ其餘ゐめきさけんで燒死々る者寶泉寺の雪嶽東光寺の藍田長禪寺の高山等兒童ゐ至まで八十四人なり

又禪僧れ語り傳ゑしよい快川濃州よ有し時信長招待とれ共肯ず今川の家よ行て甚だ今川家と輔佐ーたりければ信長惡まれ云よ甲州ゐ往て慧林寺れ住持たり信玄の死と深くかくしゝれば信長愈怒てさまくよさゝり聞せふれしよ快川のかたより泄さゝれば信長怒

りまたへか祭られしが武田亡し故遂に焚殺されしと也又其時樓下に鎗先とそろへてゐまさきとなたり玄に快川弟子の南華に法の絶なん事口としとても遁るべきにあらず然ども樓より飛で死んへと云しかば南華飛たりしかば群りたる士卒の鎗ぶすまと作りたる者ども鎗とふせたりしかば南華たそうる事と得て後豐後月溪寺にありといへりまたりといてとびたるもの十六人有といへども其名つたはらずと也

○天正十年三月　東照宮江尻に御軍と出さる成瀬吉右工門正一と以て田中城と守りける依田右衛門佐信蕃に降參とそうゝ光られ武田の舊臣悉く背て滅亡近きにありとく城と出たまへと仰れくられけるに依田從ひ奉らず武田の長臣共の書簡と得て虛實と定むべき旨と申そ其後先年遠州二股の城にてゆかりもゆへば大久保忠世に城と渡そべき旨と申せしかば　東照宮尤なりとて穴山梅雪が書簡と送ふせられる信蕃あゝに於て城と忠世に渡さければ降參せば信州の本領と為て行るべしよし仰出されしに依田承り勝頼の存亡と審に承ふざる間い仰と承りがたしと申て信州佐久郡葦田に赴々り勝頼既に亡て信長今度勝頼の二心なき輩といふとも武名ある者い諸將召かゝゆべうらずと下知し猶かくれ居る者と搜し出さて死罪に行んと也　東照宮此事といたませたまひ信蕃と市川の御陣に召れ密旨と蒙り主從六人遠州飼東郡二股の奥小川といふ所ふりくさせたまひけり其餘仁德によりて人あまたたすけさせたまひけり

○天正十年三月武田逍遙軒信綱降參しるると信忠森武藏守長可に下知して殺されけり長可各務兵庫元正と使と玄武前采女と添たり信綱刀と膝下に置てそなたず各務武前行向て武藏守が愛する馬のいなぐさまに見たまいんやといへば庭に出る處と元正二尺六寸有ける雲次の刀にて一太刀斬たりしに信綱小脇指と抽く處と采女切付

たり小性河野といふ者信綱の刀と持居たりしが即抽て采女と切兩士遂ゐ河野とも討とめたり元正鎗と合せ首とる事廿一ゐとー高遠の城攻ゐもさまより覗見て群りたる眞中へ飛入倒れたるが起ゐかゐて散々ゐ切ゐひ首ととりけるが雜尾れ棒のさー物さしてゐたりとはらふ有さまと信忠見て誰と問長可ヒが家れ士各務兵庫と申者なりといへゝ誠ゐ今日れ見物なりといはれしとぞ

○高遠の城にて戸田半右工門重改一番ゐかけ入る時赤やろゐ金の戻付の出し戸張驚れ寸戸衝木ゐ當て通り得ず尻居ゐ倒るゝ其間ゐ信忠れ小姓山口小弁佐々清藏跨ゐ越てかけ入たり戸田後ゐ人ゐ語りてわれらが如れ武功ゐていやろ指物の門木戸につかゆべれと心づく事いなれもれ也敵と見てゝふる時外の志いなれもれなりもし勝れたる武勇の人ゝ別の事ゐといひけり半右工門後武藏守と稱し關原ゐて討死也信長後ゐ感狀とゐたへらるゝ時先小辨ゐ手づから國久の刀とゐたへ次に佐々ゐ長光の脇指とゐたへ汝が武功ゝ誠に大功の丙藏助が從子なれば と詞とかけふる二條ゐて明智信忠と攻る時清藏小辨ゐ向ひそはだゐて死んゝ屍れ上の耻なるべしとて打て出一人づゝ敵と斬伏其屍と引入物の具とりて打着又切て出討死せーと也共に十六歳容貌世ゐ超て美ゑゝりけるが面ゐ血とそゝぎ髮の亂れゑと見る人殊ゐ惜をゐへり小辨ゝ伏見れ賤れ者の子なれども美少年ゐて呼出されゝり

○小山田兵衛尉信茂ゝ武田累世の長臣なりしゐ勝頼ゐ叛き降參して善光寺ゐ有しと信忠堀尾茂助に下知して殺せとなり則武三大夫と討手とす士一人そへて甲冑と送り一禮せん時刺てろせとれ事なり三大夫善光寺に赴れ甲冑と贈りまゐふそる由いひければ小山田出て一禮それども則武討べれ氣色なしやゝ有て則武ゑづかゐ武田の家士大將として數世重恩の身今度主君に叛き不義の至にしゆゑ討手ゐ參りし立向いれゐといふ小山田聞て口とくしくも計ふれけるゐとく首と刎ら

れよといへ共則武猶うごかず小山田刀に手をかけ是迄よていはといへば其とゝ則武立ゐがりて首と斬たりけゞ

○勝頼亡てのち馬場美濃氏房が女召出さるべしとて甲州の郡代鳥井彦右工門元忠に仰出されしゐ騒さがしいへど行ゑ知れざる由と申けゞ程經て其あり所知れたる由と申人の有ければ　東照宮何かたよかくれゐたるぞと御尋あり即ち鳥井がもとに潜に匿し置たると申ければすべて彦右工門いぬらぬ者かなと仰有けるとぞ

○辻弾兵衛盛昌い天正三年の掛氣よて七月甲州と出て信州小諸の與良瀧江がもとよ去のび居たりしが勝頼亡びて後徳川家に仕へ奉る甲陽軍鑑に勝頼天目山に落行時辻一揆の長となりて攻たる由と去るせるい非なり

○明智日向守光秀信長と弑せばやと思ふ事久し天正十年六月朔日の夜明智左馬助秀俊を寢所によび入れ人と退け一大事の有なり蚊屋の中に入をといふ秀俊頭と蚊屋の中にさし入て何事にてかいはといふ光秀汝が首と得させよといゐば秀俊聞て一人のみよていはかと問光秀三人の命とゞまふひ猶足ざる故也といふ秀俊いと易ゝ事よていは大事とよく成べ去といゐば光秀いふ去りたるやと問に事新しゝ仰と日比の恨おもひ合せていはといへば光秀今信長と討んと思ふ也汝と偏に頼み思ふぞよ先汝に語んと思ひしに中々諫爭ふべし汝力と合せづば志遂げがたからん從いずば汝と斬んと思ひしとて盃を出す秀俊先臣一人よかたりたまふならば諫申べしはや外ふも語りたまいんよい騒もおよばずと申事れい泄聞えて臍とかむとも益なしとく打立たまへとて夜半計ふ俄に軍兵とおし出し明れば二日の曙に信長の宿せふれし本能寺ととりかこむ森蘭丸長定何事ぞ物さわがしきとて白きかたびらの上に淺黄かの子の小袖をはをり立出て見るに壁の外ゐ水色の旗見ゆる信長敵い誰ぞと問るゝに蘭丸明智よていはと申もはてぬに筭浦

大瀛古川九兵衛天野源右工門等大庭よりとだれ入信長白刃ひとへ物と着弓持て射られしゐ弦きれたり地臙脂のうたぴら着たる廿七八歳ばかりの女房十文字の鎗と持來りけると信長れりとりまばし防がれしが内よりと入て障子と引立たをども蠋臺のいまだ殘し火ゐ信長のかげうつりたると見て天野鎗とりのべ刺通す薗丸弟の坊丸十七歳力丸十六歳なりしが切て出討死しける隙よ内よ火とかけ灰燼となりたりけり

○明智信長と弑そる時秀吉い備中よて毛利家に向て陣せしが秀吉所々よ玄のびの者と置れしに備中庭瀬よて怪氣ある飛脚の者と生どりたり秀吉其書と披見るに信長と討とらば秀吉必敗北そべし秀吉と追擊れよと毛利家へいひ送る書なりもし此書毛利家よ到らばいかなる謀あるべれも玄るべからず秀吉の慮り幾かふずと人いゐり又高松の城いたやそく攻落すべれば水攻にして日を經たるい信長常よ大功の速に成を忌弥たむれてゝろあるを察しての故なりといへり

○秀吉備中よ陣して毛利と和平せんとと計り密に手だてと運し西國の米と價と貴く買れしゐば城米と出して賣る者多し小早川隆景一人固く制してうらせず信長弑せられて秀吉と毛利家手ぎれなるべかりしよ兵粮のゆたかならざる故終に和平に及べり

○明智江州坂本ゐ城を築く時三甫といふ者

波間よりかさ弥ゐげきや雲の峯

光秀ヒきよ

磯山つたへ玄げる松村

又光秀丹波龜山より愛岩よつゞける山よ郭とかまへ此山と周山と名く自ふ武王よ比し信長と殷の紂王よたとふる心後よゐふれたりと人いひけり又志賀唐崎の松いりの比よか枯たりしと光秀植りぎて今の松なり光秀よ死る歌

我ならで誰ゝとうゑむひとゝ松まゝろゝして聞け志賀のうら風

一説青蓮院宮尊朝法親王の辛崎の松の記ゐて見れば大津の城主新庄駿河守直頼舎弟松菴「東玉」雑齋「直善」まの雑齋天正十九年卯の秋うゑふれー由其時のうたよ

れのつゝら千代も經ぬべし辛崎れ松よひかるゝそぎありせば

されば今の松ゝ此新荘の植ふを去か

○森蘭丸ゝ三左工門可成が子よて信長寵愛厚し十六歳ゐて五萬石の地とゐたゐふるゐる時刀ともたせ置をしよ刻鞘の數と數ゐ居たり後よ信長ゝたへれ人とゐつめ刻鞘の數いひゐてなん者ゐ此刀とゐたふべき由いはれければ皆おし料ていひけるゐ森ゝさゐよ數へて覺たりとていはず信長其刀と森よゐたへふれけり信長森が明敏と試ふるゝ事多かりゝれども一度もゐやまちなく其才老年の人も及ぶべゐよ非ず明智が恨ある事と察し潛よ信長の前よ出て光秀飯をくひながふ深く思慮そる体よて箸とゝ置なしやゝ有て驚たり是ほど思ひ入たる事別の子細ゝよもゝゝゝ恨奉る事去ゝ〳〵なをば大事とたくむならん刺殺そべしといひゝるを信長いやとよ佐和山をば終よ汝よゐたふべしといはれけり此ゝ森ゝれより先よ父が討死の跡よていゐば坂本と賜ゝれと申けるゝ明智よ與へふれしかば讒言そると思ひばせふれず果して弑せられき

○光秀天正七年六月修験者と遣して丹波ゝ守護波多野右工門太夫秀治がもとよ光秀が母と質よ出したばかりゝれば秀治其弟遠江守秀尚共よ本目の城ゐ來りけるゝ酒もり去てもてなー兵と伏れきて兄弟と始從者十一人と生ぞり安土よりゝ召しゝり秀治ゝ伏兵と散々に戰ひ一時傷と蒙り途中よて死そ信長秀尚以下と安土よて磔よせられたり丹波ゐ殘り居たる者ぞも明智が母と磔ゐ去たり明智遂よ赤井等と攻去たがへ丹波と信長より賜ゝりゝり又信長ゐる時酒宴して七盃入の

さかずきとりて光秀よりさしひらるゝ光秀思ひもよらずと辭し申せは信長脇ざしと抽此白刃とのむべきかと酒と飲べきかと怒られ去らば酒飲てけり其後稻葉伊豫守家人と明智多くの祿とあたへよび出せしと稻葉求をとゞも戻さず信長もゞせと下知せらるゝ去とも肯はず信長怒て明智が髮と捽み引ぬせてせたらるゝ光秀國と賜はりしゐ共身れ爲ゆ致そ事なく士を養ふと第一とそる由答けれ秀信が怒ながらさて止りぬ東照宮御上京の時光秀ゆ馳走れ事と命せふる種々饗禮の設しけるゆ信長鷹野れ時立より見て肉の臭去けるゝ草鞋ゆて踏みちらされけり光秀又新に用意去ける處ゆ備中ゑ出陣せよと下知せられ去かば光秀忍か称て叛しといへりされば信長の暴なるもとより論と待ず光秀土地と畧せん爲に老母と質ゐしてあろしぬる不孝と信長の賞せられたる君臣共ゆ惡逆の相ゐへる終と合せざると理なり

○光秀信長と弑そる時秀吉備中より引返さる此時備前の浮田八郎秀家幼少なれゞも長臣老將の面々いうなる謀ゐるや料りがたければ先使と岡山の城にやりて一刻もとく馳上り吊軍と志しゐ岡山ゆて相謀べしと云せられける浮田い元より光秀ゆ心と通じければ秀吉の歸路とふさぐべたやいかゞせんといふ處ゆかく告來ればさらば城中ゆて討とるべし願ふ處の幸なりとひそゐゆ悅びあふて其謀とぞ相議しける秀吉六月七日の明がたゆ高松より引返し午の刻ばりゆ宮内ゆ着てやがて岡山ゆ赴くべしと云ふらしけるが俄ゆ霍亂したりとて打臥ければ秀家れ使たたりたるゆ近習の者共出逢て只今霍亂にて吐瀉せしが腹れ痛少し止て寢入候と伯へしらひて時と移そ其間ゆ秀吉い奥州驛と云名馬ゆ乘り雜卒ゆまじいり吉井川とわたり片上を過宇根ゆ馳つけたれば馬何られたりさて使と岡山ゆやりて急ぐ事の候てわき道と通まて過ゐぬといはせふれしりば浮田の人々皆ゐたれけるとぞ

○秀吉信長の吊合戰せんとて備中より引返されし時姫路に立よらる

べーと人々も思ひけるよ黒田孝隆姫路に馬と駐らるべき事少きの間も然るべうらずい仮初の旅よも家出い遅々そる人情あり今度い主君の仇と討べき爲の軍よていい大和の筒井細川を始め明智が去たーをわる者ども馳加いりなばゆゝしーき大事なりいかよやせんと思慮のいまだ決せざる中よ急ぎてかーりられよと謀りたりければよくあそいひたれとて一人も姫路をよりたらん者とば忽ち誅すべしと觸させゝれ々マ孝隆先達て人と走らゝー姫路の町人ども河原を山粥とーたくして軍兵よもてなそべしと下知したりければ食肴と河原へ持出たりければ立よゝずして山崎表へ押付られけマ太閤記よ姫路よ二日滞留といへるい誤マなり

○光秀信長と弑せし時筒井順慶い光秀としたーゝれば必ず與せ去なちんと人々思へり池田紀伊守其臣日置猪右工門土倉四郎兵衛丹羽山城三人と使と去て順慶のゝもとよやらせちる三人承いりて順慶も一明智よくをせば刺殺そべしと申す紀州公いやとよ汝等死せばわが片手と折れたるに同じと制せられしゝば三人かさ祢て順慶と軍せんよいくばくの平負討死かいべきさらば三人も討死そべきよていい三人をもて多くの味方おかへたまへ順慶と討とゝば光秀必ず敗北すべーと申て順慶がもとよゆく順慶出あひていかでか光秀が不義にくみすべきとく信長の吊軍せんといゝふよげよも偽なゝぬ体なきば三人悦びて歸る道よて山城今日順慶いなといいんよ刺殺さんと思ひて坐中とたゝりと見たりしよ傍へよ十六七歳ばかりなる男の順慶が刀持て居たりしけゝたましひ只者ならず順慶お飛ゝるなゝば頭二ゝに切マりゝべく見えしと語りければ日置も土倉もされば我等もさ思ひつる事よといひけりかの小性い牧野兵太とて武者修行去て世に聞ゆる剛の者となりけり

○光秀信長と弑して安土の城と攻おとし左馬助秀俊よ守らせて山崎

より打向ひ秀吉と戰ひて敗北せり秀俊安土を出て光秀と救んと京とさしてそゝむ處よりや光秀討れたりと聞へしかば坂本は城より入んと粟津と北へ大津とさして行所に秀吉の先陣堀久太郎秀政に行あひけり秀俊小勢なれば打破られぬ本道へ敵よふさがれり湖水より馬とうち入れとよがせければ秀吉の軍兵ども汀より並居て溺れん有さまと見よと笑ひあへり秀俊は白練より雲龍と狩野永德よかゝせたる羽織と着二の谷といふ冑と着大鹿毛と名づけたる馬より乘り年久敷く坂本より有て大津より唐崎までの遠淺へよくゝたりたりたやすく唐崎ばまに乘ゆげ一ッ松の下わて馬より息ゆひの藥と飼ひ追くる敵と見て居たりしが又馬より乘り坂本より入る時十王堂の前より馬よりおり手綱とゆて堂より繫ぎ矢立の硯とり出し明智左馬助湖水とゆたせし馬なりと札より書て手とりがそより結りけ坂本の城わ入り光秀は妻子へ天守より入れ安土より光秀が奪ひとり來れる不動國行二字國俊の刀藥研藤四郎は小脇差なら柴の肩衝乙御前の釜などいへる名物の器を唐織の肩衣に包そ天守より投おろし其後女童とさ玄殺し火とかけて自害せり二の谷は冑より羽織と黃金百兩添て坂本は西教寺より送りけり後に山中山城守長俊が孫作右工門友俊冑とのぞを乞て得たゆ玄が程經て紀伊の士宇佐美造酒助孝定が許より傳へりぬ羽折へ行方と玄らず馬へ無双の駿足より秀吉志津嶽の軍より此馬より乘れしなり

○信長弑せふるゝ時　東照宮へ泉州堺よりはしまゝるゝ小勢よりかふる亂れよはるゝと三河迄いかでか引とらせたまふべゝと人々色と失へり　東照宮素より地理を玄ろしめされ河州飯森の宮へ要害の地なれゝ其地と守て軍ゆふんと仰あゆて森口より着せたまひゝ時本多忠勝京都より御使に參りけるが道にて變と聞て引ゝへ玄て來り敵大勢よりてひらんとく御歸國然るべゝらんと申と聞召案内者へいかゞそべき敵道と要らんへ必定なりやゝと討れんへ口としからずやと

仰ありける處よ信長より馳走よりけられし長谷川竹丸當國の交野郡津田れあたりゐ信長の恩と蒙りたる者あまたゐ道去るべさせゐべしと申す宇津越を經て山城の相樂郡と過ぎ木津川とりたり夫より宇治橋の上一里計東れ瀬と渉り江州信樂ゐ出それより伊賀の上野鹿伏兎越と伊勢の白子よ至て船ゐ召れ然るべからんと定ふれけり忠勝蜻蛉斬と名づけし鎗と提げ其邊の百姓と打具し此殿の案内申せといひてそれより道々の村々よてうく去たりけれゐ津田よりも案内者來りぬ其日ゐ山城相樂郡山田村よとまらせたまひ所々より心とよせー人々どもゐまた警衛し奉る穴山梅雪ゐてれまで從ひ奉ーが引別れけり

宇治より木幡越と江州高島よ至り濃州よ赴き甲州よ歸るべき旨を申て引ゐりれしが一揆の爲よ山城れ綴喜郡よて殺されけるとぞ

其翌日木津川ゐ至ふせたまふ柴船二艘ゐり忠勝からんといふに肯ざれいよくい奴かな切て棄んといふよ恐れてれせ奉るやがて渉りとゐらせたまひて二艘れ船皆打ゐりて棄たり其あけの日一揆石原村よゐりまりて待ゐけたり大和より從ひ奉りし吉川善兵衛其子主馬助柏の木と馬とるーよーて先がけして追はらふ柏を家れ紋よせよと仰ありけるとぞ夫より宇治田原れ地士山口玄蕃御膳と獻じて宇治川に至ふせたまへゐ船なし榊原が士原田佐左工門馬と乘入れ瀬ぶをして打ゐたそ酒井忠次船一艘とさがし出ーて渡ーー奉り雜卒よいたるまで皆ゐたる事と得たり江州信樂迄ゐ嶮路なれども警衛にりれ從へる人々多く一揆手ざそ事なー多羅尾四郎兵衛光敏ゐ世々信樂を領ーゐるが其子長兵衛御迎に參りたり人心はかりがたーと人々恐るゝ處に忠勝いやく光敏御敵するなふば彼が家よ入らせたまいずとものがし奉らじ一向入らせたまへと申せば皆尤なりとて立よふせたまふよ御もてなしと設け人々勞と忘れたり

又忠勝此とれ多羅尾二心有と見ばとふへて刺殺すべしといひける

故立よらせたまふともいあり

五日よりハ高見嶺と打越たまふ御供よりける服部半蔵正成ハもと伊州生れの人なれば忠勝下知して伊賀の案内者ゑたりゝり國士あまた参りて警衛し奉りて上柘植より三里半計鹿伏兎越といふ深山と越たまひて六日よ白子の浦ゑ着せたまひて長谷川竹丸秀一後藤五郎と始として和州山州伊州の士よ御假たまハり時と得て濱松ゑ参るべきよし懇よ仰と蒙りけりゝれより三河よ事なく歸ふせたまひぬ伊賀ハ去年九月信雄攻入て打從へふをし比逃ゝくるゝ者を求出し殺害を專とせられしゝば國士ども三河に参て御恩を蒙りたる人々多ゐり之かば其從類をな警固し奉りゝるとなりやがて明智と追討れ爲御軍と出されゝよ伊賀れ國士ども仍つまりつどひて参りけると多くハ大番に入させたまひ恩賞ゑ仍づかりけり

○黒田美濃守職隆後宗圓と稱そハ備前國福岡の人なりしが播磨の小寺藤兵衛敬職よ仕へて子官兵衛孝隆後如水と稱そ共よ功名あまて用られけり播州ハ其比所々に人々地よ據まて守り軍せしが小寺ハ五着に有て姫路よ小城とかまへ黒田父子ゝゝに有て秀吉ゑ頼て信長の旗下に屬そ孝隆の子長政其比ハ松千代といひしを人質に去て秀吉の居城近江の長濱よ置たり此比毛利家の兵勢強かり去かは小寺約と變せんとそ孝隆此ハ然るべゝふず信長物仍ふれ人なれども一旦天下ゑ旗とあげられん行末ハ去らず先時れ宜ゑれよ隨ふべし松千代を棄ると悲そかく申すよ非ずといさめけり小寺聞入ず孝隆父宗圓よ父子とも誅せられぬべき密謀と告ぐ宗圓物なれたる士五六人呼仍つ先所存とふよ官兵衛五着に到ふれなば危かるべしといゑ孝隆されば諫は尤なれども事も見ずして姫路よたてこもらんハ君よ弓と引よ非ずや五着に赴れて力と盡し奉公しかないずハ自害せん其後人々心を合せ父の御事たのそまかそる由決斷せられゑかハ人々父子れ一隔ふれんはいかゞハべた

只病とて五着の奴原ゝ使ともて媚諂ひ欺くゝ去くべのらず討手來らバ力あゝ其後一戰を遂て五着と打破るべし罪なくて討んとそる惡逆の人天の咎なかふんやと口々ゝいへども孝隆各存ずる旨い誠ゝ理りなれ共今病といいんゝ實とは聞入じ必主君ゝ叛くと人ゝ誹れん事士の志ゝあらず君ゝふかく思ひ入たる忠の空去くならんい運の極なれバ力なゝ一人誅せられたりともいうゝかせん此姫路とだゝ取れずバ天下の安危歳月と經ずして定るべしとて止る色の見えざれば宗圓家の恥を思ひて身とそてんと思ひ定る事士の志なりとく五着ゝゆゑて事うなえずば自殺せよゆとのとい心安く思ひいへ君の志去たがふともわを叛くべかふずといひしかば孝隆打ゐらひさらばとて座と立バ人々只今思召ゑられての仰は道言ゝゆらずやもし五着にて難とのがれたまいずバ其とき人々五着の城と枕にせんと誓けり宗圓官兵衛い官兵衛とせゝ人々い人々の志とせよと下知せふれゝかバ孝隆五

着に赴けゐ宗圓見おくり子ながふも恥かしき事なり先だりべゑ親の留りて子ゝ死絲といふてそ口としけれされども君恩淺からざるい人の存る處なり今讒言と信せらるゝまそ悲しけを孝隆とやらずして引あもり謀叛して命いとしゑ物ぞと敎るい父の道に非ず仇となりて身と殺そい恥と去る道なりりとてさめ〳〵と泣たりけるがさぞ五着よてたばりりて見んゐ今姫路ゝ弓とひく設なしぞ酒もりして時々舞うたひて日とおくれといひしとぞ孝隆い五着ゝ行て心おくべき人れもとゝ使して求め來れる着ありとて饗じ去先やかゐ語りて打とけたる体なればいかゐ行くろふとも心の外ゐゆらえれぬ事はあらじなどいひあゑり又此を疑て黑田父子い謀たくましゑ者ゝよき士あまたあゐ城ゝあもる用意せん間ゝ官兵衛と以て欺くべきも計がたしとて姫路の樣と聞ゝ宗圓金剛ゝ舞まいせて打とけたる体なれば扨い別の事もゆらじといへり此時攝州荒木攝津守村重は毛利ゐ属し信長と戰

ひ利あらずして有岡の城に引まもる此由小寺聞て孝隆とよびてこれ毛利とくみそべたとは内々荒木といひかはしたる故なり今毛利家に たよらん事いとが過なりと覺ゆるぞされ共此まゝよて手ぎれとせんに表裏者といはをんも口としければとく有岡よゆいて荒木と諫てもし聞入ば秀吉よ謀りて信長と荒木和平ととり行ふべー攝州信長よ從ばわれも眞よ心とひるが爲ぞて信長よ從ゆべぞといへば孝隆聞て信長と荒木と和平い思ひよりもいいず荒木度々信長よ背きたればいかで其言を信せらるべたぞりたりともいたづら事ならん然ども辞し申せば勇なきよ似たりとて有岡に赴く路姫路よ立よりて父子對面し有岡よ至らば必ず首とはぬべたかれさへて囚とそるか二ッの中よ過いまじ五着よ死んより有岡よて死いい信長も聞及世の譽れともなりいべしと思ひ切たる色と宗圓見て涙よむせび ぞば一物ともいはざりーがやゝ有て誠よ困厄の至極なれども名よう爲て身とそつるい義と思ふ故なりとて見送りしかば孝隆有岡よ赴たり小寺兼て村重に密に毛利よ一味すべたよ黒田父子人質れ松千代と信長よ出ー置たればかの父子は織田に内通の志有と告しらせつれば有岡の本丸よよび入れ生どりて牢よかーまみゝり五着よ此由きまえしゝば小寺いりはりて齒がゝとなー荒木が狼藉の次第遺恨深ー然れども此上い信長よ一味の心と易て毛利に與し官兵衛と引とる謀やあるべきといいせぞゝば宗圓怒て官兵衛生どりよ成ーは是非の論なー年老たる身の子と失ひいい事い誠に力なた次第あり然るよ官兵衛と救はん事いいれなきよ非ざれども先松千代と信長よ出しいい事い君も又臣父子と相計れる處よていい今度官兵衛と有岡よて捕へたるは荒木が横さまのふるまひなり相はゝれる處の人質と棄てかしとたたそくべきい逆ならずや只順道に隨て天れ冥見と待よ ぞかず我わかた時より度々の軍よ臨み小寺の家れ危難と救いに今齡かたふきたれを切たる長子とそていい

事い口とーく候へども首とくだかるゝとも毛利よ一味せよとの仰とば得承らじとて刀と抽た誓てければ使も言なくて歸りゝり宗圓が士ども五着と攻破らんといへども用ひず村重心ゐらばいたはるべしもし五着と攻なば村重も官兵衛と殺害そべし云ふぬさまよてあをよかくゐらんと思て官兵衛が女房とば潛よ此比引とり置たりとて驚ゝず村重い小寺よたのまれて孝隆と生どりたれども已がかたきよも非ざればいたいり置けりゝくて信長有國と攻るゐ及びて毛利家の後卷もせざれば城落たりけり孝隆は牢の中ゐあきれて有々る處ゐ栗山備後其時善助時々有岡に行て云のびて商家とうたらひ牢の後の沼より姫路の事どもかたりし事度々ゐて案内と云りたれば牢よ走を行て見れば番人もおちうせたり此いと驚き且悦て善助そて置たる斧よて鎖と破り引たてけれども三年居かゞと其上よ濕瘡と病て起事ゐたはずかたへなる牢中ゐ人とたのみゝきれいせて城と出寄手の陣よゆたさて姫路よ歸る事と得たり秀吉播州よ攻入るよ及で小寺い但馬よおちゆゐ黒田父子危難を脱るゝ事と得て孝隆よ宍粟郡と賜いり姫路と秀吉の城とす後よ如水と稱して智謀たくましく秀吉の功臣第一と聞えしいよの孝隆なを

○黒田孝隆播州よて秀吉の命と請長の坪といふ城と攻おとし井口猪之助三宅藤十郎よ其城と預け孝隆い秀吉の先陣たる處よ其城より逃落たる者ども一族を催し其夜攻よせたり井口三宅人も少く攻破りて昔請もいまだせざれば守りがたし殿未だ遠くいゆかせたまいじ切ぬゝて殺り後卷の事申そべ云と云合せ三宅は百二十人計よて搦手よあり云が人數と殘し二十人計と連圍と出る敵利を得て攻入たり井口い大手よて防戦しが翌朝辰の刻後卷の旗先見ゆる比薙刀よて片殺なぎ落され石垣よたより居たをども敵恐れて近付ず最後よ大書ゐげ此城ゐ大將井口猪之助ぞ首とれと自害しけり藤十郎い後三宅若狭とて

武名あり猪之助と三人の弟あり六大夫甚十郎與一之助といふ六大夫は播州北條の攝と守りて討死しけりある時孝隆の士罪ありて討手と向らるゝよ却て討手を切て兄弟三人町に出大なる屋よ取まもりたり甚十郎見て恭らんといへども孝隆ゆるされざりきゝ再三よ及ければさらばとてゆるされたり甚十郎ろの處よゆくと忽ち門の潜戸と引はなし横よとりて飛こゑ戸と以て二人と打伏せ一人い切殺し打倒した る二人も切て首三ッとりて馬よのり二町ばかり歸る處よ罪科人の從者主人の首と見て鎗よて甚十郎が馬上と目がけ飛かゝりて突けれながら其者と切そてたれども痛手よて馬より落少時ありて蘇生したるとと戸板よのせ來る孝隆膝と枕よさせ手いかよと問るゝよ如此よいと一言いひて終れり兄弟三人皆わが爲に死たる事報ゆるよ詞なしとて孝隆其父與二右工門が宅よ自往て届れ與一之助七八歳なると呼出さる既に九ッよ成ける比三人の兄い勇氣ゆゝきき者なりけるも人の生質い計がたければ試んと思ひて磔と見けるやと問るゝよ見づと答ふ今夜月明なりそれの所の磔木の下よゆき立るしを立てかへらんやといいるゝに承ひとて自御幣と切て竹よ付てあたへふるゝと與一持行て立んとそるにはりけ木動くと見て死きらぬか留とさしてとらせんとて木ふればるよ驚てはりけ木より飛下り逃るを與一扨いよくゝ次第なりのがそまじと追ゝくるせん方なく宮の有し内廻入り戸とたりればいけ迄待ても出ると切んものとと呼たるさまよそゝし名といへども歸ふされば殿の仰ふておどしけ爲よ來りたりきせさせたまふ帷子の片袖と證據よとりてゆるされよといふよりて歸りぬ朝鮮よて竹も木もなき廣野よ一筋ける道窪くて切通ふ似て其向ふ處大山ける麓よて曲尺の如し大穴と穿ち射手と籠置て行かゝる日本人ふまた射殺され屍相重れり山かげの敵多少ときらざればそゝひ者なし井口が從者山崎喜兵衛見てまゐらん馬と扣へて待れいへとい

ひすて走りこむ井口も馬より下りて走り入山崎まづ射手三人と討と
り其首を持て大音挙げて名のりたり井口攻入追ちらす井口其時い兵
助といひけり此賞美ゑ朱柄の鎗とゆるされいへと申そ卒爾ゑはゆる
しがたし一日ゑ首七ッ取てゑそ朱柄いゆるさるゝと申傳へていと人々
申ける故事延ゑけるが其後井口一日に首七ッ山崎も首六ッ取しうば
朱柄と兵助ゑゆるされたり晩年に村田出羽吉次と稱しけり
○別所家ゑて首供養したる人有と孝隆聞て秦桐若首三十一取たるゑ
惜むべいれ死したりき吉田六之介正利供養そべしといはれしゑ正利
首數二十七とりていとて辞しけるを孝隆小竊なる男かな今年三十
一歳なり此後首とるまじとや先供養して後ゑ其數と合せよとて来百
石あたゑ供養して播州青山れ南に塚と築いたり後所々の合戰朝鮮の
軍までゑ取たる首五十ゑ及べり後壹岐といふ
○天正五年黒田孝隆播州佐用の城を攻る時生田木屋之介夜中ゑ忍び
て城際ゑ近づいより懐中の小鋸ともて屏柱の根と切目じるしとして
翌日城攻ゑかの柱に鉤縄と付て引倒し先がけ玄て城ゑ入けり木屋之
介もと隅田小介といふ日向國隅田刑部少輔が嫡子なり千六歳の時傍
輩と討て出奔し播州ゑ行て孝隆の士井上九郎右工門と頼をけるに留
置いまだ對面せざる所ゑ其夜隣家ゑ人と殺し取籠たる者ゆり夫とか
ふめ出そに付即時ゑ孝隆ゑ申てそれより奉公しけり羅州生田の城に
て高名ありまれゑよりて生田木屋之介と姓名とたまいる是その高名
とながく顯さん爲とりや
○文明十五年十二月十三日備前福岡の戰ゑ
備前いもと赤松氏世々領せしゑ嘉吉元年赤松滿祐滅亡れ後備前と
ば赤松相摸守教之ゑ賜いり教之が代官小鳴大和守備前ゑあり應仁
の乱の後備前津高郡金川村玉松の城主松田左近將監元成と細川勝
元相かたらひーかば元成兵をありめ小鳴と攻んとそるゑより赤松

が家人ちり〳〵になりし者ども元成よくまとし小鴨と攻れとしぬ赤松兵部少輔政則元成と賞して伊福れ郷に置ぬ山名宗全細川勝元共に病死の後京都い少静なれども諸國い彌大よ乱を松田が一族ども備前西郡の中ゐまた押領す政則と將軍家より功を賞せられ播磨備前美作と退去賜はりぬ山名右衛門督政豐これと怒り文明十一年九月京都と出て但馬の國に馳下るゝれば政則も播磨よ馳着て此ついでよ備前れ松田が恣よ攻とりたる所とをさめたゞさんとせり元成此由と聞兵粮用意の爲よ去たる所い返すべけれども伊福の郷よ於てい軍功よりて賜いりたる處なれば返すべからずれい事ゐ托ーてゐれと打亡ん謀なふんとて金川よ城と搆ふ此城い麓よは大川流れ巖高く四方嶮よて要害よき地なりされども後卷の平だてと謀り備前國山名俊豐よ告て備前と切とりまゐらそべしといひければ俊豐是と悦べり政則備前ゐ赴き松田がおして已が地よ去たる所々ととりかへーけをば文明十五年九月山名も備後の尾道と出て同國國分寺よ着三千餘とゝり催ー十一月七日備前れ國よ打入しかば松田が一族相あつまり邑久郡福岡の城の西北の山よ陣取たり福岡の城い東西よ大川流れ中ゐ島山ゐると城よ據て政則の守護代浦上喜三郎則國と始として二千餘人たてまもり川上の瀬い長船右京亮よ野伏と添て陣取たり十一月廿一日押寄て合戰あり浦上が家人よ猶村與三兵衛同又四郎とて兄弟ゐり是より前よ元成よ奉公しける因ありーかば密にかたらひて十一月廿三日夜半風はげーき便に陣屋よ火とかけたり寄手内通よ力と得てやがて攻よせたりーよ城中きびきう支戰て追かへそ其後事ゐられて猶村兄弟とかふめとりこれと誅ーぬ寄手其後相はゝりて十二月十三日よ又富岡といふ小山ゐ兵と出そ城よりも打て出散々よ相戰ふ寄手も城兵も討るゝ者多し

福井小次郎いもと京都の人なりしが四歳の比父源左工門當國の在番
れ時連下り城中にありしがあとー廿一歳なるが其日の軍に父子の間
と敵味方にわかし隔られ父い城中に入たると思ひ走り歸りて尋るに見
得ざれば又城外に打出て寄手に向て福井小次郎と名乗たてさま横さ
まに切て廻りしがあまたに戰ひ切られしを家人肩にかけ城中に引入
しに淺手深手二十六所被りければ終に死たり父城に歸りて小次郎が
手箱と開て見るにあまた書置たる其中に母の方へ幼少より別れまゐ
らせて此儘に討死せば御なげき有んにそ心にかゝるいへばし此世
に殘たまゐとも終には逢奉るべたにてはへば思ひ先しまけてなゞさ
ませいへとこまゝと書ておくに
生れおし親子の契りいかなればなに世にだに隔へつらむ
と書たましよりて思ひ定先たる討死なりと人皆とゝしみけるとぞ
○文明十六年正月六日又福岡にて軍あり城兵敗北そる處に藥師寺四
郎左工門薙刀をとり返し合せ爰にて討死そるぞとて支戰ふ同彌四郎
等四郎左工門と討せじと取て返ひ津坂の山の麓より城際まで僅の兵
にて多勢と防て拂退にしゝ寄手の中に福屋九郎右工門とて剛の者
鍬形打たる冑と着遂間もなく四郎左工門に切てかゝりしに四郎左工
門が家の士返し合せて福屋い討れぬされども寄手いよ〳〵追ひ先し
ゝば藥師寺次郎左工門頼田十郎左工門片岡孫左衛門三人引返し枕と
ならべて切死にたりけり是い三人必死と約束たる故とぞ是より
前三人物がたりせし時次郎左衛門いひけるは此度の軍必味方打まく
べし松田いもとより當國の者なり後卷と味方より申せども播州の加
勢も來らず敗則眞弓峠の軍に打まけ姫路に引退ひと聞ゆれば味方い
力と失ひぬさらばとても討死そべき身にて人の後にながらへてあら
んも本意にあらず重て軍あらば必ず討死せんと語りければ兩人さゝ
てたれ〳〵も同じく存る事ぞとに互に同じ處に討死せんと約束しゝ

るが今日次郎左衛門打出るとて唯今敵の手にわたるべき首也最後れ對面そべきとて鏡に向てにりまと笑ひて出しとぞ額田は岡本筑後守よ向ひて子ゐてい又三郎い一子あをばとりわゝて不便よ存る也ゐれと一所よならハ必死とのがるべからず宜きく計ひたまゐれといひければ心得たりとて引わかちしかばけふ討死とせざりきと也片岡いゐが家來ゐ向てわが首必敵ゐとらるべしこれと去る去よ死骸と尋よとて小よりを以て左の二の腕と二重よ結ばせたりーが果して是と去る去よ死骸と求先得たりとうや

常山紀談卷之五終

一山崎合戰の時堀秀政室寺の山ととる事
一森寺政右衛門武名の事
一則武三大夫功名の事
一瀧川一益廐橋と退く事
一光秀愛岩山よて連歌の事
一幸田彦右衛門が母義死の事
一志津が嶽合戰秀吉智謀の事
一堀七郎兵衛見切れ事
一志津が嶽七本鎗の事
一石川兵助戰死の事
一佐久間盛政生捕るゝ事
附久右衛門安次源六郎賣敗ガ事
一尼子家の十勇士
一信雄長臣と誅せられし事
一平松金次郎始末の事
一水野勝成高名并行狀の事
一本多忠勝忠勇の事并忠信社實の事

一榊原康政秀吉と誹りて札を立ふをし事
一初鹿傳右衛門が事
一秀吉　東照宮の御陣へ戰書と贈られし事
一東照宮蟹江御出陣の事
一東照宮は御軍畧を依て蟹江城陣參の事
一九鬼嘉隆蟹江の湊出船の事
一中村一氏紀州の一揆と追拂いれし事
一竹中重治は事
一戰國の士功と讓る事
一羽柴勝雅敵と免る事

常山紀談卷之六

備前國　湯淺新兵衛元禎輯錄

○山崎合戰は時堀久太郎秀政の士は子何がしといへる者明智がもとを奉公して有しが光秀夜のいまだ明ざる內を寶寺の山に兵とれしあぐべきと謀りしを父のもとを告やりて思ひよらず敵味方となり明日の一戰を及ばん事を歎ぎ其書狀を則秀政を見せたりければ秀政夜半に寶寺は山をかし上り陣を待かゞたりけるといかで知るべき夜明がたを明智が先手押寄たる處を秀政山上より鉄炮を打かけ不意を切てかゝり追崩して一戰を利を得たり

○山崎の合戰を明智が先陣と護國公は先陣と戰といどむ時を侍大將森寺政右工門忠勝眞先かゞて敵と追たつる森寺が馬印檜木笠なりしを明智が者共見てけふ檜木笠の馬じるを持せたる大剛の者下知せし有さま目とおどろかしい姓名を承らばやと度々呼いりゝるを秀吉聞

てけふの軍森寺が一人の武名と揚しとて桐の紋付たるはとりとなた
為られ々り
○山崎の軍ゑ堀尾帯刀吉晴れ士則武三大夫首と取て吉晴の前ゑ來る
吉晴おもひ出よりも出かしたりと詞とかゝられしかば則武怒て首と
提てすゝをよりかゝる時い大將も目れくふくなる物にい則武三大夫
が取たる首よく御覽いへと罵る吉晴もよくき奴哉といふまゝゑ刀を
抽て斬られしゑ胄れ星を削りたり則武眞一文字に敵の中ゑりけ入又
首と取て歸る吉晴は必ず則武は討死せんと悔をおもれれし處ゑ則武
來れば大ゑ悦んで汝をさきゑ先たる詞賞そる餘りゑおもひしよを
もといゑる剛の者ゑいふべき詞ゑあらずわが過ちゑてゑそれ汝が
二度の先がけ大きゑをぐれ玄よと感せらをけり
○天正十年瀧川左近將監一益は信長の命により關東の管領と玄て諸
將の質ととり上野れ廐橋ゑありける處に六月七日信長弑せらるゝの

變と聞老臣ども事とかくさんといへども一益惡事千里といふ諺あり
秘そる事能はゝとて上州嶺の城主小幡上總介信眞鷹巣の城主鷹巣三
河守信尚金山の城主由良信濃守國繁館林の城主長尾但馬守顯長小股
の城主澁川相摸守義勝倉賀野の城主倉賀野淡路守秀景白倉の城主白
倉左衛門佐藤岡の城主内藤大和守秋宣安中の城主安中越前守高山の
城主高山遠江守重光五閑の城主五閑刑部小泉の城主富岡六郎四郎石
倉の城主長根縫殿介大戸れ城主大戸民部直光木部の城主木部宮内貞
利和田の城主和田右兵衛大夫信業那波の城主那波對馬守宗元武州忍
の城主成田下總守深谷の城主深谷左兵衛憲盛松山の城主上田又次郎
政朝等の諸將と招ゑ信長の變とりげ各の人質と歸玄いろぎ上京して
吊軍そべゑ旨とかたる諸將大ゑ感じ此一大事と告て人質と歸されん
といふいかでか二心いべき人質と其まゝ置て仰ゑ從ふべ玄といへば
一益諸將の義心謝そるに詞もいはず北條の表裡定ゑて一益を討取て

上野をおしとるべきなふん此方より打向ひ一軍せんものとて城ゐゝ同姓の彦次郎忠往と守りゑ置一万計の兵と率ゐて神奈川ゑれしー出そ

一説に北條家より人質を渡しーはやく城と出よさらずば一戰すべしと言送る一益吾信長れ命と受關東の管領たりいま危ゑ臨で何ぞ北條が下知ゑ付べゝやとて兵と出せり共いゐ

北條氏直果して小田原より兵と出し武州兒玉郡本庄に着て先陣北條安房守氏邦神奈川おかし寄一益ゝ川と後に去て相戰ふ大敵支へがたく討るゝ者多し一益廐橋ゑ歸り其日討死せー人々の姓名を過去帳ゑ書て黄金と添寺ゑ送りて供養去諸將とゐりめ暇乞とて酒宴去一益鼓とうち兵の交り頼ある中れとうたひければ倉賀野淡路守なごり今ゝと鳴とりとはやし終夜酌醉て太刀刀取出し上州の諸將ゑ引出物ゑし懇ゑ暇と乞て六月二十日廐橋と打出て各人質と歸去けれども皆うけとゝずして驛馬等の事沙汰し是と送りて笛吹嶺ゑ至時國人の人質悉く歸去木曾路より歸京そ瀧川彦次郎ゝ一益が長男三九郎二男八丸を伴ひ木曾路ゑかゝる時一揆起り八丸と奪ひとられしと一益が士古市九兵衛一揆と追拂ひ八丸と奪ひ取て一益と同じく長島ゑ歸る

一説神奈川の合戰ゑ八丸生捕れしーと古市追討て其敵と切ふせ八丸と奪ひ取て連歸るといへり又笹岡平右工門津田治右工門ふそ留りて討死しける其間ゑ一益兵と納て廐橋に歸るといへり笹岡平右衛門ゝ一益の馬とりより取立られば氏ゝ笹岡彦次郎是とゐたふ武功度々ゑ及て士大將となり武者奉行たり又酒宴ゝ倉賀野ゑての事ともいへり

關東ゑて一益廐橋と引ものふひたるふるまひ殊ゑ賞美ーけるとぞ

○天正十年五月廿八日光秀愛岩山の西坊ゑて百韻の連歌しける

とゝゝ今ゐ光が下去る五月うな　光秀

水上まさる庭のなつ山　西坊

花かつるながれの末とせたと先て明智本姓土岐氏なれば時と土岐とよみ通いして天下と取れ意と含めり秀吉既よ光秀を討て後連歌と聞大よ怒て紹巴と呼天が下去るといふ時い天下と奪ふれ心あらいれたり汝去ふざるやと責らるゝ紹巴其發句い天が下なるとしゝと申然らば懐紙と見よとて愛宕山より取來て見るよ天が下しると書たり紹巴涙とながーて是と見たまへ懐紙と削て天が下去ると書換たる迹分明なりと申すみなげよも書かへぬとて秀吉罪とゆるされけり江村鶴松筆把よてゆめが下去ると書たれども光秀討をて後紹巴密に西坊よ心と合せて削て又始のとくゆめ先が下去ると書たりけり

○織田信孝秀吉と弓箭をとる時信孝れ乳の人と人質よ秀吉のもとに出し置れしと蹟よして誅せらるかの乳の人の子は幸田彦右衛門とて信孝の士大將なり是より前秀吉信孝の長臣等とかたゝはるゝよ岡本下野守い同心して信孝よ背きけれども幸田は背ゝず幸田が母誅せらるゝよ及で子の彦右工門よ書と送りて我今空しく成事ゆめ〳〵歎くべからず親い必子よ先だゞ習なり唯忠義を守りて君よな背き叅ふせろと言つゝいしければ聞人感じあへり天正十一年四月十八日秀吉れ先陣信孝れ地よ責入る時幸田兄弟いさぎよく討死したりけり幸田が母は實よ漢れ王陵が母の志とも云つべし但ー王陵が母い天下と去ろしめそべき高祖れ事と議たれども只今危難よ迫れる織田家よ忠と尽せといへる眞よ有がたれ事なるべーー

○佐久間玄蕃盛政柳瀬にて中川清秀と討取りける時秀吉長濱より一騎がけよて來ふれけり志津が嶽よ到れば日暮ぬ陣の相去る事二里計なり盛政使と以て早くも軍と寄られい相待ていはぞよ夜明ば矢合仕るべしとぞ言送りける秀吉れゝて是より申さんよゆゝしくも承りい明日いさぎよく軍ととげいべしとて使と返して後吾よ怠ふせ夜討せ

んとのおとならん遠江異國の張良い去らず我とたばかるべき者日本に有とい覺えずとて野わも山にもうゞゝと透間なく焚て白日の如し佐久間い敵人馬の行程と急ぎて疲れたる處を襲するりとおしよせ打破らんと思ひけるに秀吉の謀に夜討の支度空しく成にけり

○志津が嶽れ合戰わ堀久太郎秀政兵と分ち出さんとするとき其臣堀七郎兵衛押留て曰勝家の陣にゝ佐久間が陣に類りに使來ると見ゆ疾く引とれとの事なふむ若引取ば玄蕃本のこちをば歸るべからず去ゝらば間近き所にて戰ゆるべし玄蕃引取ずば勝家かならず來て軍ゆるべし此二ッを出べゝらず兵とゝゝれすして待べしといふに玄蕃も退ゝず柴田も進まざりしかば勝家運尽たりと言しが果して敗北しけり又志津が嶽れ事を老功の人に問しに勝家の詞のとく玄蕃引とらば勝利を全ゆるべし玄蕃が言の如く勝家押詰來らば必ず敗軍すまじき也兩將互ひに猶豫して勝と失ひたりとぞかたりける

○志津が嶽にて佐久間が人數亂るべきと秀吉見て近習の人々に向て爰ぞ鎗と合せよと詞とかけふるれば各競ひ進む福島市松加藤虎之介加藤孫六郎片桐助作平野權平脇坂甚内糟谷助右工門七人なり其夜秀吉今日の七本鎗のものとて呼れけれども誹とい咎事と知らず其時指を折て數へふれ去かば前に進み寄たり是より志津が嶽の七本鎗と世に唱へゝり中にも福島一番に進で鎗と合せたる上首と取たりしかば五千石あたへられけゝ其餘い皆三千石與へられぬ福島い紙の切裂去なへの指物加藤嘉明い紫ほろ清正い紙の去で馬をん片桐い銀の切裂えゝる平野い紙子の羽織糟谷い金の角取紙のえゝるの指物さゝれたりとぞ

○志津が嶽の前夜石川兵助と福島市松と口論し既に刺違ふべき体なりしと座にありし面々明日の軍に身と捨て高名を遂ふるべきにまい いかなる事ぞと押留けきば石川面々の前にて口も得明ざる市松何とてはに鎗先に向ゆべき明日わが後影と見よか去と言捨て出けるが

直ゝ柳瀬ゝ趣きて只一人眞先ゝそゝみて討死しけり人々其勇氣いかゞしけれども其怒りい戒とそべしといひあゑり秀吉石川が弟長松ゝ感狀と與へゝれけり其文ゝ曰

今度三七殿依二違貳一軍二美濃大垣一之處柴田修理亮勝家出張柳瀬一欲レ遂二一戰一之時兄兵助先赴合レ鎗令二擊死一拔群之攪動發於二眼前一見レ之尓雖レ爲二若輩一念二兵助之壯志一與二秩千石一向後愈可抽二忠節一者也

天正十一年七月五日　秀吉

石川長松殿

とかゝれたり

○志津が嶽の軍破きて佐久間と生捕來る秀吉見て汝い武勇逞しき者なり助て國と與ふゑし二心なかゝんやと問ゝ盛政冷笑ひ我ゝ國と與へなば汝と生捕搦ん事今日我身のうへの如くせん新ゝ恩と受るとも柴田と忘んやといい殉死そべきゝ及て大紋紅裡廣袖の小袖白帷子ゝ空だゝしゝて呉られゝ一生の終りゝ風流と尽したし是一ッの望なりといひしかば秀吉其望ゝまかせられしかば大ゝ悅んで是と着たりゝり玄蕃其時廿七才ゝな人をしゝわゑり

柴田亡て後其從子佐久間久右工門安次源六郎實政兄弟紀州ゝ遁れ粉川法師三池とかたゝひ河内嶮坂ゝ城と構へ後亦南河内天野山の國見を要害ゝして度ゝ軍しけるが遂ゝ秀吉ゝ攻落さる後に小田原ゝ入り北條亡て兄弟金澤の稱名寺ゝありと秀吉傳きく伯父勝家の爲ゝ吾と仇とそる志誠ゝ大丈夫といふべし今日本平均去ぬれば必と改よとて安次に一萬五千石實政ゝ一萬石與へて蒲生氏鄉ゝ附らる兄弟氏鄉ゝ一禮しける時躾々るゝと人をゝ笑しゝば氏鄉物の思慮なく汝等が奉公ぶりと彼ゝ競ふる事ゝ兄弟とも壘障の士にあらざる物と言れけり

○尼子家十勇士と世ゝ唱へけるい山中鹿之介戮原炎之介五月早苗之

介上田稲葉之介尤道理之介早川鮎之介川岸柳之介井筒女之介阿波鳴戸之介破骨障子之介なり

○秀吉信雄と打亡さんと謀て先信雄の長臣岡田長門守津川玄蕃淺井田宮丸瀧川三郎兵衛とま祢き懇わもてなして後信雄ょ自害とそゝめよさらば恩賞ありく行ふべしと語られけり聞入ずば首と刎ん氣色なる上神文と書よと責らる四人力なく承ぎぬと言て起請文と書よけり秀吉も約と背らじと神文を出されけり是い一人づゝかたらふべきと一同に招きたるは信雄に告知らする者有て殘る者と誅せさせせんとの謀なり又ゝな秀吉ょ實ょ心服せずとも既ょ神文と書たれば疑ひて一和すべからずと思慮せらをたるなるべし瀧川い素僧なり去と信長呼出し四万石の地を賜り去身なれば長島に歸て信雄ょ斯と告申せば頓て三人を誅せんとて長門い飯田半兵衛玄蕃い土方勘兵衛田宮丸い森源三郎と討手と定ぎられ侍り土方承はぎて長門とは臣ょ仰付られい

ぬ打留申さんといい飯田既ょ定りたる上は何の申條のあるべきぞといへば信雄さらば長門とは土方討いへ飯田い既ょ下知去たれば討たるゝ同じとて長門を土方ょ譲りけり土方が斯言けるょ故あり土方い始先彦三郎と云けるがふとく過しく胸より手足に至るまで毛生熊の如くよて勇猛の士なり長門常ゝ土方に語りて殿は人の申事輕々しく信せらをて日比ぎを疎まるゝよと度々云けると土方ゝれは厳か又い汝の心の違たるならんといへば長門いやゝ此長門とは必ず誅せらるべし其時汝討手なるべきよたやそく討るべき身よゝふずといへば土方聞て討手の仰と奉いらんに此勘兵衛ならで又誰かなるべきと語りたるょ長門仰ょ寄て此七ッ瞬切落したる脇指ゝて汝が頭と斬破んと云ける詞ょ依て斯い申せしなり天正十二年三月三日の禮ょ岡田信雄の前ょ出けるとと相圖とせられけり岡田其日い脇指と横たへて廊ょ出る信雄新ょ遣らせたる鉄炮を見よとて指出ゝ此臺尻の穴い何の爲ぞ

と問るゝに岡田少し差うりむく時土方りとより引組だり岡田已とやといふまゝに脇差と七八寸抽ゞれども大力に強く抱られて抽も放たず糸ぢ合ける處と信雄土方はなせ我自ら切んと詞とかけられしに臣と共に斬せたまへとて放さず信雄はなさゞれば いけ逃も斬まじといれしかば土方岡田と実はなさざまに小脇指と抽て指通せば信雄そかさず刎て殺されたり津川い此騒ぎと聞て走り來りけるが信雄ゐ行逢刀と取延て切たりしに廊下れ長押に切付たると飯田傍より刺殺しけて浅井とは森討留たり是より出て秀吉と弓鉄をとられけり

○平松金次郎重之甲州れ温井と同じく天龍川と渡る平松先達て陸に上り船に残れる従者温井に無禮の事有て忽ち切殺しけり扨平松に斯といふ間もなくてと言ゞれば無禮そる者い吾も捨置じとて色も變せず人をな平松と詐りける所に幾程なく長久手の軍に平松と鳥井金次郎と先と爭ふて鎗と合を平松が相手い森武藏守長可の士山田八右工門とて始め播州三木の城主別所長治に仕へて名高れ勇士也平松肥後とりて小男なりしのば　東照宮さゞ走廻り不自由ならんと常に笑いせたまひしに其日御前に進を出不行歩者今日鎗と合せていと立ながら申て傍若無人の有様あり賞せふれしゝども猶不足におもひけるに前田利家れ士山田出羽其時平一郎とて秀次に仕へしが秀次に申て一萬石の禄にて招かれけり平松是に約一京ゐ趣く時心易れ朋友に暇乞して立去けると聞一召追々討手と出させたまゐ大剛の平松なればと第一番に渡邊半藏續て河村善七郎大久保與一郎坂部治兵衛段々に追ひけゝる坂部袋井にて逢ふ平松い久能へ行本坂越に遠州可睡齋に曹洞宗の禪寺立寄と物語す坂部は兄三十郎に用の事有て横須賀へ行とて打連たり道の別際にて久しく逢じと馬より下り暇乞そる時坂部平松を一太刀斬たるよいかゞ云たりけん切はづしければ平松坂部が眉間と切る坂部眩けれどもさしもの者ゐて落人ゐり打留よと呼いるとき

近所ゝ郷民輩り出るゝより平松可睡齋へ入たると取圍を横須賀より
も馳集ひ寺と取卷けれども平松ゝ爰ゝ居ずといゝと小僧と捕へて
責問ゝより平松何方へも逃る者にならず爰にて腹切んとて立出坂
部三十郎ゝ向ひ治兵衛ゝ殊ゝ親しく語りけれども不便ながら身にか
ゝる火と拂ひて是非なく切たりといゝ三十郎きゝて治兵衛疵淺ゝと
答ゝ平松吾斬る程にて助るべきや日比の交り故とゞめゝ刺ざりきと
いゝて腹切とゝ三十郎介錯せんとすれば平松治兵衛と吾手にかゝ今
汝ゝ首と討れんゝ心よりらずとて同心せざりしと也
又一説ゝ平松ゝ度々口論の時後れゝを殊ゝ遠州新井の渡り舟ゝて
柏原新五郎平松が従者と討たるゝゝ先〳〵と云て有りれば人々嘲
笑ふ　東照宮聞召人ゝ何ともいゝ平松が眼ざし剛の者なりと仰ら
れしが果して長久手ゝてかゝり兼たる所ゝ平松茜の羽織を着十文
字の鎗と提をゝみ出池田家の軍兵の眞中ゝ鎗と入たりける其後出

仕の中ゝて諸士に向ひ吾胎内より厚恩と請をだりゝ一命と捨じと
思ひしが今ゝ早思ひ殘を事なし誰ゝても出られゝ撫切にそべ〜昔
の金次郎とな思はれを殊の外あら者ゝ成たりと大言〳〵けるゝ一人
も答ふる者なし平松が勇名高く聞えて先年天王寺勝曼の鎗貝殼
塚ゝ鎗備前八濱の鎗とゝを言ひたへれ平松が鎗は近き頃まれな
りと世の人賞しけり秀次一万石ゝて招かれしかば平松立退々ると
聞召小栗又市渡邊半藏河村善七郎坂部治兵衛を追手ゝ出させたま
ひ岡崎へ早飛脚ゝて本多作左工門ゝも御下知あり平松終に袋井の
北なる可睡齋ゝて自害をとゝもいへり
○長久手ゝ軍ゝ水野忠重の嫡子勝成は目と病て冑と着ず鉢卷したり
けるゝ父見て汝が冑はゆばり壺にしたるかと罵ふれしゝば父ながふ
餘りの詞かな眞先かゝて首と取か吾首と敵にとらるゝか二ッ中ゝと
いふまゝ馬引寄て打乘りもろ鎧とあてゝ駈出を忠重ゝれいかゝ

とて太田重助といふ士と共に呼歸されけれども耳にも聞入ず又水野喜右工門はせ來り引留んとせるを勝成見たと睨で壘の上の諫いきゝも入べし只今大軍の中わかけ入功名せん時止をとて引返せやうやゆりといひもてゝ秀次の將白井備後守が陣に突てかゝり冑首をとりて馳歸る此日は一番首也勝成ゆら者にて人と物ともせず忠重の心に忤ひ虚無僧となりて國々をめぐりて武者修行す後に忠重死去て　東照宮勝成に三州苅屋と賜ひて日向守と稱して大坂の時大和口の先陣と去て大功あるし人なり勝成十萬石を賜ひて後愈士に下り身といやしくしてもべて士に貴賤いなきもの也主君なり從者となり互に賴をあひこそ世をたり習なをされば大事の時い身をもてゝ忠義をなを事ぞかし汝等我とは親と思はれよ我汝たちと子とおもいんと常に士にいはれけり年老て鷹野に出る時行歩りなはず蒲團にのりて士にかゝれ士番所にていふとん共に下に居て年寄ての鷹狩とかゝるべし鳥とふん爲にゆらず心ゆりての事也と度々いひて打過られけり或時鷹狩れ野にて昔勝成に仕へ来士と見かけいりおなりりしや我方にて祿三百石なり去に立去て越前にて千石の祿とゆく今爰に來らを去いいかと問に彼士仰の通り祿い越前にて增ひへども殿の下をいたはり懇にもてなをたまふなじを祿に換がたく暇乞て歸りひぬと申せばに勝成大に悅び折にふれ思ひ出せし也とて即日に祿と增與へふれけりその〻ち勝成隱居して又鷹狩の時彼士の家に門閉たると見ていかにと問る〻に美作守の心に背く事有て暇と乞走りぬと答ゆしらば彼者い越前の祿千石を捨て小祿の我家とをたひて歸りし者なるよいりに作州い思ゆるにやかくいふ勝成い若ゆ時心得過て武藏の金川根笹流の弟子となり尺八一本携へて虚無僧となりて日本國をめぐり或時い堂塔に夜と明し或時い野にも山にも日と暮し様々に艱難にあひ人に誹ふれをが一言虚妄といふ事なく不仁のふるまひせざりし故にや

今福山十萬石と賜りぬ然ども下の情と云る事いまれ虚無僧たりし故也返す〳〵も惜むべき士と失ひぬるよ美作い下の事い云ふれぬぞかしそべてよき士い主君又は頭れ下知をも無理成事い心服せずたとへ少云の過ありとも能士い二度も三度も知らぬ体して猶己がたくハ傍聾よ諫させんものと美作の敢事なげか云ひぞとて泣れけるとかや

○東照宮小牧に陣しておはしませしが秀吉兵と分ち中入をと聞し召敵の迹よ從ふて向をせたまふ小牧には石川伯耆守數正酒井左工門尉忠次本多平八郎忠勝と殘させたまへり然るよ秀吉大軍と出して長久手よ向はれけるを見て忠次い秀吉の本陣樂田を押よせ火とかけて攻撃べしと云々れども石川秀吉後よ變有と聞て彌怒られなんと強て押へて止りけり忠勝い秀吉れ馬印と見るより僅お五百ばかり引具し小牧とうけ出小川一筋隔て秀吉お相ならび長久手さ云て馳向ふ路おて足輕と進先鉄炮を打のけ一軍せんとすれども秀吉見ざる体よて取合ず龍泉寺れ前にて忠勝馬と川よ打入口と洗ふ秀吉ゆの鹿の角の立物の胄と着たるい大將よ誰か見知たると問るゝよ稲葉伊豫守道朝過し年姉川れ軍よ武者出立見知ていい本多平八郎おていと申もゆへぬよ秀吉涙とはら〳〵と流し五百に足ふぬ士卒ともて吾八萬の軍おかゝ合さんとそる千死に一生もなきぞかし然るに道と隙ぞふせ已が主君れ軍よ勝利あふせんとの志勇といひ忠と云誠よ類なれ本多ゝな秀吉運強くば軍よかたんゆたら者と討べからずとて弓鉄炮と制せられけり斯て忠勝長久手よ馳付たれば軍終りて敵味方ともよ見えずよいいゝよと云所よ味方打勝小畑に入せたまへりと聞もみよもんで追付奉り御馬の側お乘寄云がひなくも小牧よ捨させたまひかゝる軍よ合申さずと申々れば聞し召取あへず汝が躬い我身也とおもひて小牧よとゞめ後よ危れ事なくておろ軍よい勝たりと仰ゆりゝり其後天正十八年秀吉北條と打亡し七月廿六日野州宇津宮よて平八と呼れけり忠勝

い下總は廳南ゑ有けるが急ぎ恭る秀吉諸大將並居たる中ゑ呼出し熊野より佐藤四郎忠信が胄と得させたる者あり四郎が忠義後世まで聞傳ふ四郎ゐ劣ふぬ人ゑ着せなんとれもふゑ誰ゐ有といいれしに答る人なし其時秀吉四郎ゑまさる者い平八也子細い玄か〳〵也と長久手の軍物がたり忠勝の有さま審に云れて則胄と忠勝ゑ賜いりければ忠勝面目身ゑ餘まる心地して出られけるゑ其晩又忠勝と招て傍の人と遠ざけ自茶と與へけふいくらも諸大將並居たる中ゑて汝が武勇と褒たるい秀吉が恩ならずや主君の恩といつれぞと問るゑ皆と低て物言ず頻ゑとれいれけをば忠勝承いり誠ゑ忝しとい申せども累世の主君の恩とならぶべきゑあらずと申されしかば秀吉愈感せふれりゆ

一說ゐ忠信の胄と賜いりけをども悅ぶ色なしいかにと問へばいやとゑ忠信武勇さのを羨ーくもなし主君と仰ぎし九郎判官も吾爵位も同じ唯世々家ゑ傳たる鹿角の胄ゐろよけれといいれーとぞ後忠信の胄い二男忠朝に讓り鹿角の胄い嫡子忠政ゐ讓らをたりき忠朝も思所や有けん鞦も付ずして置れゑとぞ

○小牧陣の時榊原康政秀吉の事と誹て札ゐ書織田家ゑ向ひて弓と引事不義惡逆の至也と書て所々ゐ立たると秀吉齒噛して怒り康政が首ととらん者ゑい十万石の地と與へんとぞ觸ふれける其後　東照宮と和平して婚姻の約ありける始の使ゑ康政と賜るべーと秀吉申されて京ゑ上りしに秀吉對面ー小牧にて札と立たる時汝が惡き筆と一目見ん事とのを思ひしゑ今斯和睦ゑ及べば其志と悅びおもふ也此事と直ゐ言んが爲ゑ迎へたり小平太と呼んいいりゐ也叙爵然るべしとて式部大輔とい此時よりぞ申ける備嫁禮ありて厚く馳走ありけるとぞ

○勝頼亡て後武田家の士多く　東照宮ゑ仕へ奉る前に領したる祿知と書て奉れと仰出されけるゑ初鹿傳右工門い加藤駿河守が二男にて兄の源五郎い川中島ゑて討死しりり傳右工門其祿と受繼たりし故祿

地と書て出しけるが駿河守が二百五十貫の地とも合せて書記せり駿河守が嫡子丹波三男と彌平次と云兄弟共ゑ傳右工門ハ源五郎が祿とゑそ申べけれ駿河が祿と合そる事れ有べきやといふ事聞えて本領四百貫のゑ下ー賜はりぬ傳右工門人は皆親兄弟の祿地と記し出して其儘賜ハりたるに吾ひとり不然とて御朱印ゑ墨と塗り詔らハざるゆゑゑかゝる有樣なりといふと岩間大藏左工門訴申て無禮なりと仰有て祿と召放さる翌年長久手ゑて傳右工門密ゑ御旗本ゑ來り眞先かけ三宅彌次兵衛と爭ひて首と取る傳右工門ハ内藤四郎左衛門が傍ゑ參りて申たまはらんやと云と其間十間ばゝりゑて御覽せられ傳右衛門連來れと仰ふれーかば御前ゑ跪くいかゐ汝が無禮なれどもゝふ軍の先がけゑたをばゆるそぞと御詞ゑ傳右衛門涙を流しける時三宅先ゑ臣と一番高名と御詞とかけさせたまへど傳右衛門ハ猶そゝみて首と取ひと申けをば三宅が實なる志と感じさせたまひゝり

○東照宮の小牧の陣と秀吉ハ一重湟の城の櫓ゑ上り見やりて高山右近大夫幸任と呼で小牧に書翰と遣り一戰せんと思ふ也十三万の軍兵陣と整て押出し後ゑ柵の木結て引退かざる手立せんいいかゑと云れしかば高山是ハ思召止らせたまへ小牧よりの返書必ず怒らせたまハん事と申來るべしといへども秀吉増田長盛ゑ書翰と書せ長岡忠興ゑ敵陣の木戸なる道ゑ立まと下知せふるゝ高山色と變じ仰なりとも行なとを制しける秀吉忠興は弓箭の烈しき所為ハ思ひもよらじ剛の者と使ゑせんといハれーかば忠興高山を睨をてつと立て馬ゑ乘竹ゑ書翰と挾を乘行て村立たる松原の小塚の上ゑ押立て歸ると見て秀吉悅ばるやゝ有て小牧の陣より月毛の馬ゑ乘紅の母衣掛たる武者書翰を取て歸るゑばらく有て金ハ枇杷へらの指物さし鹿毛なる馬ゑ乘たる武者書翰と竹ゑハいさみ元の所ゑ立てけりゐれ取來れと言れーかば忠興又馬ゑ乘馳行て取歸るを秀吉拔ゐ讀るーとに　東照宮の返書ゑハな

く渡邊半蔵重綱水野太郎作正重が書簡あて其詞に後ゑ柵結て一足も引まじきと思ひ定めて軍あらんに事兎も角もの事ゑい三河者下部ゑ至るまで一足も逃ると申事聞ばかりも不存候とぞ書たりけり秀吉讀も終ふずいうられければ高山さればゑいんとて申たる事よと居丈高ゑ成て申そ秀吉冷笑ひ馬率出させひたと乘僅四五騎ばかりにて松原の小塚ゑ上り磬と打たゝ敵の大將ゑを喰へと大音ゑ呼いる小牧ゑり唐冠れ冑に孔雀の尾の羽織着たるい秀吉よあまそなとて鉄炮と打かくる秀吉天下れ大將軍ゑい矢の中る物かいと言て去づゝと歸られけり

○尾州蟹江ゑ瀧川一益中入そと告來る時祐筆尊通といふ者御出馬可被成者也と書けると　東照宮此可の字と削れ今日ゑ於ていい一字も大切也大敵と謂ゑ置れ可出馬とおくれたり出馬そるとい其時とぬかさぬ也と仰られけり

○東照宮長久手の軍ゑ勝せたまひ勢州蟹江の城前田與十郎と御攻ふふんとて打向いせたまふ所ゑ加勢多く馳入けると御覽じて敵いろはども城中ゑ入よと仰られ去を酒井左工門尉忠次承て何とて押留たまいぬどやと申す。東照宮いかゞおもふぞと御尋ありしかは忠次城い堅固なり多勢こもりなば爭か攻落すべきいかなる御心かいと申そと聞召大將謀と言やうやあると仰られけるが其後援兵の乘來りける船を追拂はせ粮道と絶せたまへば粮忽ち乏しく成て城と渡し降參しけり

東照宮四十二歳の御時なりと。

○蟹江ゑて井伊直政兵とすゝひ秀吉の船手の大將丸鬼大隅守嘉隆日本丸といふ大船ゑ乘蟹江の湊ゑ漕入て打上り堤を隔てゝ戰はんとせ去が引退て船ゑのる處ゑ入江れ湊ゑ　東照宮の兵船角新造といへると横樣ゑして左右ゑ乱杭とうち其中ゑ取圍まんとそ直政い追かくる丸鬼が者共多く討れ水主揖取驚騒ぎて船と出去得ずかゝる處ゑ丸鬼

が士村田七兵衛鉄炮に薬を込間宮造酒亮が舳先よて下知しけるよ大音上て静に相だ先おそると兩軍なりを静めて見物そ其中よ九鬼が者共ひた〳〵と船よ乗組たるい村田が躬と捨てさづ先ん爲の謀なり斯て村田おも鉄矢坪よ中りて間宮倒れしかば九鬼が者共力と得鉄炮と打うけ船と乗浮先て湊と出よりり

○秀吉小牧よ陣と出そ勝紀州れ根來雑賀の一揆を押ゑんた先中村式部少輔一氏と岸和田の城よ置れ〳〵り紀州れ一揆秀吉大坂と打立と聞て二萬三千計二手よ分れ一手東の山際より堺ゑ向ひ一手い岸和田よ押寄るとやり雄の若者共二騎三騎城と出で寄手よ向ひしらば士大將早川助右工門川毛貔左衛門引歸れと使とやると一氏聞てかゝる時進で行重りたる武者と引んとそれば敗北するものよいざ打出んとて鉄蓋ケ峯と名付し冑の緒とし先城を乗出先ゑ進んだる者共菅笠れ馬印とふりかへり見てすいや殿社出たまへ軍い勝たるよと言程おろあれ

一萬餘の紀州勢に面もふゝず切かゝる打破て七筋よ分て逃ると追ふ一氏は三百ばかりよて堂の池といふ所に扣て先陣の歸ると待處ゑ堺海道よ馬煙くちゆ見ゆ是い堺よ向ひたる敵の返し來れる也荒手の大軍よかけ合て戰ん事思ひもよらず疾城よ楯籠らんと口々よいへば一氏いや〳〵退くならば味方氣挫て打負なん一寸も退く時い先陣と捨殺し城とも攻落さるべし一鍬い何百萬もあれ先陣とだよ切崩なゝば二陣い忽ち敗北そべし我よ任せまとて敵の一同よかゝりがたき地の理と料り堂の池と前よして大敵と待れけり一氏馬とば悉く城へかへいへ馬と引付おく時い引退たき心の起るぞとて將椅に腰かけ旗本三百ばかりれ勢鎗と膝の上に置て折敷たり新藤勘左衛門強弓矢櫂草の手利なるが散々に射る射去らまされて手負死人例れ重りてた先らふ時一氏弓の者の羽壺と勘左衛門よ渡せと下知せられしかば愈指詰引詰射ける矢にゆだ矢なりけり一氏靡と取かゝれといゆて立上る黒田如水

は大坂にありしが岸和田より敵押よせると聞子れ長吹十四歳になり出が岸和田よりあればいざそくいんとして七百ばかりをよして敵の後よりかけ來ると一氏見て意そくをおそれさるんで切てかゝり追立て八百餘の首と取たり如水は長吹いかにと思ひ處ゐ貫羅紗の羽織着て鹿毛なる馬よりの今朝討取し首と鞍の四方手より付て馳廻ると見て悦るゝ事大方ならず秀吉一氏より感狀賜ひてけり一氏い豐臣家諸將れ中よりも勝れし勇將なれば加藤嘉明も羨み喜ひて吾子の明成を式部小輔になしけるとぞ

○竹中半兵衛重治と美濃の菩提の城主なり後に秀吉の軍奉行たり謀畧ある人なれども打見たる處い婦人のごとし軍に臨む時も猛威なる事なし馬の皮にて包める甲と着木綿の羽織一の谷と名付たる冑の緒と出先靜り返りて居けり重治向ふ度ごとに士卒戰ずして既に勝たりと勇ミゐへり重治或時軍物語せしに子の左京いまだ幼かりしが座を立ければ重治軍い國の大事なり何方に行と問ふ厠にゆくと答ふ重治

欠

MISSING

爰に溺をたるゝとも軍物語の大事の席を立事やあると怒られけり

○稲葉治左衛門は美濃齋藤家に士戰場にて必ず眞先に獨進を出芒の如くなる所に居ける故世の人是を芒の治左衛門といひけり澤害嶽は美濃飛驒よりくれなく若た頃より功名あり芋から畠の鎗澤一番なりと言と吾よはらを稲葉なりと云て互ひよ讓りて決せず澤は吾早く進みたれども稲葉がほろの手をきむる隙よ先よ乘込たり實れ一番稲葉なりといひ人皆是と賞しけり有吉武藏が足輕鉄炮よ鎗と持添て鉄炮とうち其上一番鎗と合せたるが吾一番にあらず園部儀大夫がほろの手とぶるを見て駈出ぬ園部が一番也と讓りしと同事よ戰國にかゝる士いまれなる事にあろ

○羽柴下総守勝雅のもとよ二藏三藏とて物しありいづれの城よてれ事にや有し下總守城より出て働き引取たるを敵付來る二藏三藏門と固めて揚簀戸を下して敵とたてこめたり勝雅下知きて門と明て敵二

人を出して討取ず近藤石見守加勢たり志が其子細を問だてまをられたるは死地に入たる敵なり是と討は城兵餘多死傷すべ〳〵打留れいとて軍の勝敗にわづらふずと答ふ石見守武功の人なりしゆゑ大に感じたり

常山紀談卷之六終

常山紀談

卷之七八

東京圖書館

和書門	雜史類	二八函	五架	二七九號	一〇冊

常山紀談卷之七目次

前田利家
末森城後卷合戰の事
利家鳥越城と攻らるゝ事
本多重次
強諫の事
秀吉東照宮に和を乞れし事
東照宮驛樂ゐて秀吉公より御對面の事
一本多正信遠謀言上の事
一東照宮伊豆より北條父子より御對面の事
一信長公平手政秀と惜きたまひし事
附小瀬甫菴信長記太閤記と著し事
一謙信信玄二將の批評
一甲陽軍鑑虛妄多き事

常山紀談卷之七

備前國　湯淺新兵衛元禎輯錄

○瀧川一益佐々成政等信孝を推崇て秀吉と弓箭を取しゑ天正十二年九月成政八千ゟ兵を率ひて加州金澤の城主前田利家の士大將奥村助右衛門永後に伊豫が守る所の能登の末森の城を圍む成政旗本を以て後卷を押へ嚴しく攻る此城だゑ打破ば能登は一日ゑ討從ぬべし後卷なき中に乘取れと下知しけり奥村僅に三百ばかりの士卒ゑて爰を詮度と防ぎけるゑ餘りゑ强く攻られて今い是迄なり自害せんといひけるゑ助右衛門が妻小袖とかい取鉢卷とし刀と横たへ女房ゑ粥と手桶ゑ入させ塀裡の人々ゑ自らふ飲せ昔楠とやらん云し大將ゑ日本國を敵ゑして城に籠りたりしとゑ明日い金澤より後詰のいべゑ只一夜防ぎたまへと云て打廻ると奥村見てけふの振廻男子ゑ優れり此城と女の力にて持得んい口惜と自負の色あり此城たやすく落べからざる

と見て火攻よせんと云者ありて成敗いや〳〵大手の城門と取て富山れ城門とそべし又石動山の衆徒も吾よ心と合す火攻よいそべからずと下知して既よ二三の丸と攻取て夜の明るを待居たり末森より金澤へ行程九里ばかり其日酉の刻よ斯と告て夜の明るまでい堅く守るべしと申送る利家聞もあへず金澤の城の廣間へ出利長と呼で汝い城の留守せよと下知せらる利長いやゝ〳〵其先かゝて佐々と打破るべし殘止ふん事思ひもよらずと申されゝれば利家さふば父子打向ひ敵の不意と討よ利あふん軍兵と整るに及ぶべかふず馬ゐ鞍だに置なふば一騎がけゐうち出よ一足も疾出るを今宵の功とそべーとて富田與五郎後越後守ゐ汝津幡よ行て不破彦三よ末森の後卷の先手せよといへと下知せら る富田巳が宿所ゐ驅歸り馬引出ー打乘諸鎧と合せて驅行けり利家士卒みな汁とかけて飯とくへとて物具せらる庭ゐい黑の馬と引立たり利家れ北の方後芳春院三方よのしを入れ父子よ參ふせふれ扨人々聞たま

ゐ我い利長れ母なり今日の後卷は誠よ大事れ軍なるべー各心と合せ功名ーたまへ末森を敵よ取れなば各達も討死ゑたまへ我も人手よかふりいまじとて利家の側近く進ゑより末森と敵攻落ーなは討死せさせたまへ利長も母が此詞を能聞れよ生死の別れ也といはれしゐば利家あら心よや成敗と打破らん事必定なりといひもあへず物具れ上帶とし先結べる端と切て捨て馬よ打乘る父子の兵五百ばかりよ過ざりけり利家馬上よて味方の小勢は吉事なゑ佐々が思ひもよらざる處に切てかふゑ打勝べし奥村討せゐば生がひなゑと言りふ津幡の町を北ゐ打過らをたる時富田乘來る津幡は金澤より四里餘りの行程なり利家汝いづくよ寢て有けるぞと罵らるふを富田たふて津幡よ馳付不破が門と叩れ申渡し不破物具着ていと見て打出いゐばえや門外よ旗と指出ーいひぬ何國よゐ寢申べきといゐ利家尙聞入ざりーかば富田怒て其日の一番鎗を合せけり是利家士と激そるの術あるべゑ利家れ士

卒退々駈付ければ三千餘りよ成けると二陣より分け一陣い敵の後より打ゝる一陣い敵の旗本より突でかゝる成政軍兵疲れし上思ひよらざる所に奥村も門と開きて打て出しゝば成政大に敗北せり是天正十二年九月十一日の軍なり後わ聞よ成政山の尾崎を越敗軍と集め陣と立直し見よ〳〵今前田とい臥男が勝に乗陣を乱してかゝり來るべー大返にして利家を打取べきとて物見二騎と出せきが乗歸りて敵い城と後にあて靜まりかゐりてかゝり來るべき物色いいずといふ成政謀違ひけり

末盛後卷の事加越合戰記に見えし處大同小異よて詳なる故併せて爰よ記そ利家い加州の内石川川北能登全州と治め金澤の城にあり成政い越中の守護にて新川郡富山の城に有きが越中立山さら〳〵越の難所と僅よ從者百ばゝりにて忍びて打通り東美濃へ出秀吉と織田家の弓筈大敵にたやすく勝がたからん成政北國より攻登りて前後より挾打て秀吉と亡しなんよは加賀能登越前三州と賜はりいゐと信雄に相約きまたゝらさら〳〵越より富山に歸り佐々平左衛門神保安藝守と相計り成政れ二人の女ありし中一人は秀吉へ人質に出し置たりしかば其妹と利家の二男利政に妻そべ況由を平左衛門きて言せきかば兩家縁と結び目出度といひあゐり天正十二年七月廿三日成政の使佐々平左衛門金澤に趣き祝の物取揃へ相贈りけり利家篤實の人なれば成政の奸謀有ともしらず引出物して悦びの上村井又兵衛を謝禮の使とせゝる成政八月い忌いとて延置夜々北れ櫓にて軍評定せられけるに心付て密に利家に きらとる者あり利家虚實辨ゐがたしといゐども怠りて不意の變に打負なば弓筈とる身の耻辱なりとて加越の堺朝日山に城と搆へ村井又兵衛を大將と きて千五百餘りにて守ゝしきんた柵と付廻る處に八月廿八日成政より佐々平左衛門前野小兵衛に五千の兵と指添て押寄たゝ加賀の者共

居住の支度せんとて金澤に歸りたるも有て折節七八百にゐ過ざり
々りされども村井大剛の者ゑて味方と勇ゑ立る處に利家馬廻りの
士阿波賀藤八江見茂十郎見廻に參り合せゑが急ぎ歸りて注進と賴
ばやと云けれは兩人色と變じ金澤にゆりとも斯る事と聞は驅來る
べゑに參り合せたるゑろ幸なれ然るゑ空しく歸れといふ事やゆる
と怒りければ村井聞て誠に賴母しき事悦ぶに餘りゆり但し路次に
一揆起りなんゐ必定なり各歸りに恐あらば爰に止らをよと言しか
ば兩人此詞ときゝて扨ゐ路の一揆とれろれて歸るまじとやさふば
駈歸て申さんとて馬ゑ打乘金澤へ四里半ばかりなる道と只一時ゑ
驅歸斯と申せば利家さらば後卷せよとて不破彦三田野村三郎四郎
片山内膳岡島喜三郎原隱岐武部助十郎などと打具し貝と吹せ揉ゐ
もんで急がれける折しも大雨降しかば成政の兵も一時ゑ攻破りが
たしとや思ひゝん城と攻ずして引返しぬ是より和談破れければ能

州七尾ゑゐ利家ゑ弟五郎兵衛安勝同孫左衛門良繼高島織部中川清
六長九郎左衛門等三千餘ゐてゑ先おき能登加賀越中の境末森ゑ奥
村助右衛門ゐ千秋主殿土井伊豫と添て千五百計ゑ先られたり加州
津幡の城ゑゐ前田右近越中の堺鳥越ゑゐ目加田又右衛門丹羽源十
郎と籠られたり成政も俱利加羅の嶺ゐ城と構へ佐々平左衛門二千
餘利波の城ゑゐ前野小兵衛ゑ二千青山の城ゑは國士菊地伊豆守荒
山ゑ城を築ゑ神保安藝守氏春ゑ家老袋井隼人ゑ守ふせて七尾の押
とを神保ゐ成政の聟なり四千の兵ともて森山と守りけり利家斯と
秀吉ゑ告ふれゝれば秀吉聞て佐々を疑ひ加州ゑ又左衛門を置りる
ゐ吾謀りしゑ違ゐざりけり利家兵少しといへども必ず成政ゑ切勝
べー願て師を出し成政を討亡そべゑよとて使者ゑ黄金三十兩
與へられぬ九月十一日成政末盛へ押よせ二里ばかりゝたゑの坪井
山ゑ切所を前ゑ當て陣し佐々平左衛門山下甚八前野小兵衛ゑ始と

して八千餘攻よせ外構の町家に火をうちかけんとせし土井伊豫敵ゑ町家と燒れてゐ生がひあしとて二百計ゑて突て出散々ゑ戰ひ々れども大敵ゑうけ合せ終ゑ討死そ城兵も爰と專途と防ぎける間速に落べしとも見えざりゑかば成政後卷心元なしとて神保安藝守氏春ゑ四千餘を差添て川尻といふ所に陣ゑて加州の道と塞ぎたり利家末盛より告來るとひとしく金澤を打立不破彦三村井又兵衛と先陣とす

一說ゑ成政きびゑく攻て二三の丸水れ手と乘とり本丸ゑ攻詰たり末盛れ飛脚息切るゑりゑ金澤ゑ馳來り文箱と投けるとぞ十一日未の刻の事也末盛は水乏し廣岡の水を汲てさゞいに入急ぎ追付ゑ後卷の土產ゑせんとぞ下知せられける偖同國松任といふ所金澤より三里ばかり隔りて利長居城なれゐとう〳〵末森へ向ゐれよと言送られけり金澤より四里計なり々る津幡の城へ急ぎ押付ふれゑかば弟れ右近秀繼廊外ゑ出向ひ利長と待るべゑやといゐれしかば城ゑ入れしゑ利長戌の刻計ゑ津幡ゑ馳着れけり利家怪んで吾成政と若ゑ頃より數度の軍ゑ逢ゐれども利家を越たる事一度もゐらずされども成政侮るべゑにゐ非れども無二無三ゑ一合戰して勝利と得ん事掌の中ゑゐりと大音揚て呼ゐり勇ゑ進まれけるゑ寺西治兵衛入道右近と相議ゑいや末森ゐ落たるならん殊更川尻ゑ神保多勢ゑて道を切塞ぐと聞えゐへば後卷ゐいかゞゐんと申利家大に怒りきたなゑ諫ゑ必ず口ゑも出そまじき事ぞとゑ人ゐ一代名ゐ末代とゑそきゝ奥村や土井と捨殺して已來たとゑ日本の主となるとも此耻辱そゝぐべかふず成政大軍ゑもゐふばゐれ吾馬廻り計ゑても快く軍して勝負と決せん事不足なしいかゑ村井汝ゐ如何おもふぞ是非一戰と思定ゑたるぞと詞とかけられしかば又兵衛きゝもゐゑず有無れ一戰の外何の是非かゐべゑといゐ利家悅んで村井が心も吾ゑ同じとて早打立れしゑ右近茶漬飯と進ゑ且上手れ占師の

山伏のひ召て軍と占はせられんやと問利家氣色よから弥ゞ夫々として呼出されけり五十ばかりの山伏なり懷より書物を取出そ利家ともあを後卷よ決定したるよ能見よといわれしよ山伏書物と懷ゟ入れ今日吉日也時も吉時也といあば利家汝功者也頓て打勝賞美そべ去と快げよ打出勇ミ進で押ゆかれけり村井不破先陣原隱岐前田又次郎片山内膳二陣田野村三郎四郎青山與惣兵衛近藤善左工門前田慶次郎押つゞく宮川但馬武者奉行たりといへり川尻のあなた一里ばゝり高松といふ所よて利家胄と取て着忍びの緒の餘ゑたるを切て捨られしゝばさてゝ今日と限りの軍よと人々生て歸るべしとゝ思ひもよらず篠原勘六とて利家の近習の士廿三に成しが横根と煩ひ起臥も心に任せずされども是非打立べきとせしを汝ゝ殘り留りて吾討れなば堅く城と守りて秀吉ゟ後卷と待ひへ叶はずゝ其時腹と切と下知せらをしかば殘りけるが乘物よのり與力の士二十騎打具し川尻近く成て馳付篠原勘六叅りひひぬと大音よ呼ばりけをば是と聞人々天晴剛れ者なりと云ああり川尻よりゝ津幡ゟ人と付て伺いするに馳歸て前田父子津幡まで出たれども後卷あるべしとは見えずといふを聞て神保ゝ大よ備とゆる先けり利家先陣ゟ乘行たて村井不破よ濱際と一騎打よ馬の舌を卷せいゝよも靜よ押通れと下知せらる神保ゝ兵と押出し待かけたりと物見の言去のば又富田越後此時六左衛門と物見とせらるゝ馳歸りて敵ゝ一人もいゝず川の杭といへりの多くひと人と見誤りたるならんとう〳〵おさせふれひへと申利家川杭とゝ何と證にせんと問るゝよ越後さればひ武者ならば並びの揃ひ候事あるまじと存じ猶も慥に見ん爲に川中まで馬と打入れて心靜よ見て候是と見損じ候程ならば再び弓筈ゝ取まじと申す利家汝が見る所あそ正しけれ士の手本よせよと悅れけり偖兵と進先てれ〻通るに神保是をば夢にも知ず後れて聞付たれども利家ゝ今濱と

いへる石の上なる山は兵をおし付陣せられしは夜明よければ利家馬と乘廻し兵粮とりかひひへ今日の軍勝べき事心易かるべしと下知してみな馬より下たり爰にて見れば利長七八百計兩先陣千三百計旗本千五百には過ざりけゞ利家けゞの軍功名せん盡ん取分て賞そべし若討死せば必ず子孫と見放そましと高らかゐ下知せられ夫より山と下りて兵と進むるゑ道二筋あり一筋ハ末森の道二筋は成政旗本への道なり村井坪井山へかゝり寄成政と虜にせんと申利家聞て尤なれども成政必ず嶮と前に當てや陣そらん只末森へ馳付敵と追崩ゑ城中の者共に力と付んいいかゑ村井承り可然ハ城中士ども只今の仰と承りふぞ辱がらんといへり程なく末森近くかゝり詰たれば村井が者共餘多首と取來る末森ゐハ二の丸ゑ籠りたる千秋主殿助瀧津金右工門已下寄手攻入ると追出し力の限り戰ひけるが討死ゐまたゐ及べり本丸も既ゑ危く見ゆれども奥村助右工門少も氣と屈せず支戰ひける處ゑ砂山ゑ當て朝驛れ晴間に利家の馬印見えしゝば力と得勇ゑ悦ふ事大方ならず今少ゑ後卷かろかりせば城陷るべきに運を開ひしハ偏に利家神速の兵機と得ふれし故なりゝ村井又兵衛田野村三郎四郎と始として鎗と打入散々お戰ひけるが成政先陣の大將佐々與左工門と村井突伏ければ士三十餘人枕と並べて討死ゑ利家の先陣佐々と討取興と作りかゝ切崩せしかば寄手敗北しゝるゑ利家見て搦手へ廻られけり寄手ゑも究竟の兵餘多有て待ゝけたれば利家旗本五十騎ばゝり靜ゑゝりける所に半田半兵衛眞先ゑそゝゑ一番鎗と名乘ける處と櫻甚助鉄炮ゑて搏たりしゝば左の手ゑ當り鎗と抱て倒れたり半兵衛と甚助ハ從弟也しが指物にて見知ける故甚助も半兵衛ながふへずハ不便なる事としたるゑと涙と流しけると後にハ聞えけるとかや利家敵の鉄炮烈し延々ゑせば叶ふまじ只かゝりて追崩しハへと金れ切裂の再拜と取て下知せられゑかば曾釋なゝく競ゝりて押崩す寄て餘多討れゑ敗北せしかば金澤の士

騰聞をどりとぞ上たがける利家城中ゟ乗入て奥村をしめ詞ぞ仕け今度籠城の働言語の及ぶべきゟあらず利家いかにれも臥とも汝がいひ甲斐なくて城を明るゝ又攻落されなば口惜かるべきに斯る功名やゐるといさゑ立らる其時野村傳兵衛山崎彦右工門一度ゟ鎗を合せたりとて一二れ爭論せり利家半田が異先かゝゑたるゟ冥加なく深で負志と遂されども勇士れ志い顯はれたり二士一同に鎗と合せたをども傳兵衛名乗たれば一番とは野村に極めたるぞと下知せゟれ二人に千石の加祿をあたゑられけるとぞ半兵衛い疵いえて二千石與ゑ士十五人與力に付らをけり成敗の旗本ゑも後卷のよし聞えゑかばさらば一軍せんとて八千計押出す利家是と見て此勇先る勢ゟい百万もゐれ恐るゟゟ足ず先陣い又兵衛せゟ二陣い城主なれば奥村三番い不破彦三と定ゑふれけり能州の國士長九郎左工門四五百計ゟて馳來る敵味方分明ならねば物見とやるゟ長が兵なり遅く馳付りる事口惜ゑ事也弓筋の冥理ゟ盡たりと憤りけるゝ物見の脇田善左工門野村七兵衛聞て馳歸て具ゟ申せば利家長を感せゟる〳〵事大方あらず皆とり〳〵に長が志と褒立れば努々後れたるゟ非ず淺ゟらざる擧なりと招紙を添たる書と長ゟ與へられたり成敗いかゟ思ひゝん打出たる兵と引ゑとひ山ゟ添て引退く折ゑも武者修行ゑて來り居たりし本多三彌い無二無三にゟ〳〵りて成敗を討取べゑゟと云けれども猛將れ成敗なればゐろ手輕く引拂ひたれと人々言しゟば付墓はずして止ゟゝり討取首七百五十三とぞ聞えー利家い成敗城を攻落さず空ゑく引返そとと怒り引退く体ゟして津幡の城へ寄せんも計り難しとて奥村を城に止ゑ兵と餘多指置て末森を打出られしに追々に兵加はり一萬計ゟ成にけり又不破村井を先陣として濱邊ゟ指かゟり津幡ゟ馬と入られゑかども成敗い津幡ゟ押寄ずして引取々り佐々が軍兵金のぜーの指物したれば坪井山い曜き

ひたりて見えけるを利家打詠めあれ見事なる備立よ頓て成敗を攻亡し我士卒よ指そべたよと言れけるとぞ秀吉此勝利を聞日本よ比類少き武功と賞せられぬるとかや利家奥村よ其日持せられし馬印金の切裂の再拜着ふれし甲冑を賜りて賞せられしといへり

○天正十三年四月八日前田利家金澤と打出島越の城を押寄らる島越れ城は金澤よりもと兵と入置たるが去年末森の時城と明退て成敗の軍兵入替り守りければ利家是と憤りて攻落さんとの志也城兵も久瀬但馬守其外撰みたる者共五百計門と開て突て出利家の先陣と追立る利家いかたへなる山の尾崎よ陣して馬と立られ玄よ味方敗北そると見て山崎少兵衛いかゞ玄たるやはや返そべき鹽合なるよと言も終らぬゐ白れ羽織ゐて進み出たる者のいとへば利家山崎出たるよ早味方勝たるぞと言れけり旗本の早りとの者どもうけ出んとするを敵の勢競ひかゝりて足れ蹈止がたき時なり今少一待いへと下知せらる

徳山五兵衛只今鎗と合たると見えたり地煙立いと言けり然るよ近邊れ越中の兵城々より助來て敵の陳い黒みけれども山崎が與力鷲津九瀧と名乗鎗と打入たり早うゝられいへ左なくい九瀧危ーといへども山崎靜れと云詞の中九瀧倒れたると見て山崎進を出て鎗と打入押崩して城際まで追打ゐ玄たりゝり城兵門と指固めければ利家强て攻すして引返されぬ此軍の前利家の近習の士九里少瀧勇氣と蒙り居たるが成敗馬廻りれ將杉江彦四郎と組打して谷へ落組玄かれ杉江刀よ手とかゝたる處と下より少瀧小脇指にて具足の鎖のはづれと刺通し刎返玄けれども氣つあれて首と取事を得ざりしよ片山内膳が從卒來りて少瀧を押のけ相討と云て首を取たり利家細やうよ事と糺明ーて少瀧が功名に定り勘氣とゆるし鞍置馬とゐたへられけり

○天正十三年三月　東照宮濱松の城よて疔を病せたまひ近習のわか人よ膿と强く押せたまひしより痛を甚しく既よ事切させたまひ

と城下より申ける程の事なりけるを今いかうとや思召けん御遺言を仰出され玄よ本多作左工門重次恭りて先年臣と療養せ丶糟谷政利入道長閑が藥と付させられはと申けれども聞し召入させたまいざり玄かば作左工門大よ怒り殿い徒よ死したまいんよ此作左工門い年老ぬれば只今自害して待奉るべ丶とて座と立々るを御覽じていかに作左工門氣狂ひたるか未ながらへたるよ自害とい何事ぞ吾なかふん後てそ大事なれと仰らをし時作左工門夫いい人よりてれ事よりは若き時よりを幾度となき軍場よ數ケ所の手と負世の中の畸といふ畸い身一人よかりげりひぬ今日まで殿の御情よて人がましくも候也只今殿過させ候ひなば北條を始として敵國より攻來らんわ殿よおくを奉りえか丶しく軍そる者やひべた國は忽ち滅亡すべし其時作左衛門路の邊よ餓死せんながらへたらばあれよろ徳川家よ奉公せ丶本多作左工門よ何と賴ミにながらへたるなど人よ嘲り笑いるべし近た頃武田の内よて甘利殿とて人の敬ひたる人も武田の運尽ぬをば今い本多平八郎が組となりかゞまを居ると見るも哀なり是た人の上ならず勝頼の不道にて滅ーたるも殿の藥とたらひたま殿も同じ理よひと申せば　東照宮尤なりとて長閑と召し頓て藥と奉り給と大よ玄て作左工門すゑ奉りければ夫より痛ミや丶輕くならせ賜ひければ作左衛門聲とあげ泣て悦びーとぞ

○天正十四年正月秀吉織田源五郎長益羽柴下總守勝雅天野佐左衛門三人と使と玄て　東照宮よ和平と乞れけり三人歸て和平れもひもよらず重て來ふば首と切んと德川殿申さをー由申入る又ゥさ弥て三人と三河へ遣し强て和平と請せふる　東照宮三河の吉良にて左れ手よ應を居させたまひて三人に御對面あり三人申けるい信雄卿の厚恩と忘れての事よい候ねども秀吉計略し瀧川三郎兵衛よ羽柴れ姓と與へ下總守になーー神戸の城主とーー三萬石の加祿し其外數多都よ妻子と置自ら人質と成候ひぬさまく丶れ謀候ゑば此度和睦候いずい秀吉軍

と出し清洲にて勢揃ひして打向ふべきと也四國中國の兵も相加わり去々年小牧の時より兵十萬も多うるべきゆゝしき事に候と申々れば東照宮聞ゝ召去年十一月伊勢の奈合にて信雄卿と和平れ時わが方より也已來別の事ならじなと云たるも我をたばかるの謀にて吾家の石川伯耆守に十万石與へて我に背かせたゞ吾弓箭と取て發向せんと思ひきかぞも織田殿の國と打過て軍せん事いかにと怒とおさへて止ぬるに無禮れ事ぞも也秀吉清洲にて勢揃せんあろ望む所なれ鳴海表にて一軍まゐるべし然ふずい東美濃に打出て土岐遠山惠奈三郡と切取べきとてむちと指上られ此鷹一もとにて手配すべしとて打笑はせたまへば三人歸りて秀吉にかくと申す秀吉たゝて扨も大勇將かな今夜思慮そべーと言れし時丹羽長重進ゝ出て必ず軍い思召止りたまへ長重が士ぞも刀の鞘袋と設し故子細と問ゝ鞘に三ッまたと拵へ合戰の時い鞘袋と捨て三河武者ゝ紛れ命を助うるべき支度なりと申ゝも果ぬに蒲生氏郷

堀秀政もとなゝ士卒其心得お候万お一ッも利候まじといへば秀吉よーゝ徳川家を打破りて各ゝ見せん物をとて止ければ三人退出し道にて彼猿は死所なくて物お狂ひやと私語たり翌日諸將とおつ先三河を打滅さんは安けれぞも智勇の大將なれば吾日本と治むべき事と相談せん爲に縁と組妹を嫁ゝて和平せんとて三人とやられしかば東照宮三ヶ條の誓文を御所望おり秀吉許諾して和平ゝ及ばせたまひけり四月秀吉れ妹濱松ゝおいしまして後に京ゝ登らせたまふべたむ孫と秀吉請て秀吉の母大政所を質とせられしかば都ゝ登らせたまはべきゝ定りけり長臣ぞも是は危たる事也然るべかふざる由諫め申せぞも聞召入たまいず其時申けるい和平又破れ秀吉攻來り候とも素より鋒先の强きい言にや及び候べたる何十萬の大敵なりとも打負候まじ强て思召止りたまへと申ければ　東照宮聞召諫る旨尤理なりさぞも秀吉ゝ畏れて行ぐゝおわふず日本久ゝく兵乱ゝて四民安堵せず此頃

やゝ治たるに復秀吉と弓矢ととらばいかの世まろい諍論せん只とく秀吉ゝ對面ーて日本太平の基とせん若し危難ゝ及びなんゝい万民の命に替らんゝ何か惜かるべしとて九月廿日濱松と御首途有けるゝ定りければ人々廿日い四ケの惡日とて千人出て一人も歸らずと申傳ゑ候一日御延引然るべからんと申す　東照宮千人行てゝそ大事もわゝめ我今度一万二千の軍兵と引具ー上京そ此軍兵一人も生て歸ゝずば吾爲れ大吉事なりとぞ仰られける井伊直政と御留守居とし此度若秀吉詐と搆ゑ變に及ぶとも危ゝゝじ尾張大納言信雄い必ず吾ゝ告知ゝせて味方たるべー丹羽五郎左工門い秀吉ゝ恨あれば心と合せなん其外吾ゝ志と寄る人多ゑ去ども我も亦其備なゝゝんや秀吉不意に謀あそならば京都ゝ火とかけ東寺ゝ楯籠るべし其時素より立置たる汝が組一萬と五百づゝ二十に分り外そ酒井榊原か今度京上る供の外留置たる兵一万是も二十ゝ分ち佐屋の渡と千種と越押上るべし若大津ゝて

支るならば武田四郎が長篠ゝて懸り ゑ如く切てかゝらば上方武者一支もそべゝゝず又瀬田の橋と焚たらば字治より攻入べし新七籠之助といふ角力取二人い宇治の案内者なれば召具そべし斯の如くなゝば秀吉聚樂と退ゝて大坂に引取ん所を東寺と清水と兩方より挾て打破らんゝ恐るゝゝゝ足ず秀吉詐妄の謀となさい吾天下と掌に握るべき兆なりと仰ゝれ御出馬ゝり秀吉と御對面事故なく歸らせたまひけりされば危ゑといしろし召れけるが故ゝ万民の命ゝ替らんとの御詞天地神明も感應ーて遂ゝ國運と永世ゝひゝかせたまひけるにこそ

東照宮聚樂ゝて秀吉に御對面饗禮ゝりゝる日秀吉白き紙子の羽織ゝ繡したると着られけり

蒲生氏鄉其頃三十二歳ゝて狐紙と名付呼れーとなり

淺野彈正長政彼羽織を御所望いゑかしと私語ければ　東照宮漫ゝ人の物ともらひたる事なゑと仰あり長政又御所望いひなゝ秀吉大ゝ悅

れひべき素此羽織は物の具の上に着たとは設なれは一旦は辞し申されんを強て乞得させられなば秀吉何事の悦ひ是に増るべたとしひ申せば　東照宮止事を得ずーて許容まー〳〵けり偖聚樂の城門にて毛利浮田と始め居並ひて拜謁ゑさて茶と奉て後　東照宮彼羽織の事と仰出されしかい秀吉よろこびて手づかふ着せ奉り扨大名に向ひ我に物具させまじとの事ならずや誠に天の冥加ゐ叶ひたる秀吉なりと語ふれ々る東照宮歸らせたまひて後長臣達に聚樂れ事ども御物語りありける時吾に羽織と贈りて後秀吉吾に物具させまじたとの志なりと諸大名に向ひて云れゑい斯る後い爭か秀吉の鉾先ゐ向ふべきと中國西國に語りつぎ言りいで普く世人の口に有べし筑紫れ末までも聞えなん是天下の大名に威と示すの謀略也其遠大の謀輙く測るべたにあらず力と以てこれと推んとするとも及び難た秀吉なりされども吾志を所い別に有とぞ仰ありける

○太閤　東照宮と饗禮ありしにかせ盤と始め器殘ず葵の御紋と蒔繪に ゑ誠ゐ美と尽ゑたる次第ありゑを　東照宮本多正信に語ふせたまひ如何なる思慮や有らん吾も亦遠き慮ゐるべきなりと仰られしかば正信承りされば小笠原與八郎氏次い勇將の譽れ世上ゐ聞へいてたれ〳〵も旗下に つはやと志し有ゑに氏次同心仕らで御家の旗下仰に從ひいひき彼が内々れ志い信長と朝倉と一戰あらん時必ず三河より御加勢に御出馬有べし其隙とうかゞひ御家の領國い已が掌の内に握らんと存いて偽二心なき有樣に候ひし彼が計りし如く姉川の合戰信長援兵と乞れゑに小笠原を先陣に命せられし故心中に挾む所ありといへども辞そべきやうなくて姉川にて御勝軍ありき小笠原が二心なき体に見えしに御乘なから御心に乘せられぬ所有し故姉川の先陣小笠原と御定有て彼が支度相違せり人の乘所をのらじとそるも一物有ていい乘る處と乘なから乘ぬ心あるとよしとそ豐臣家の乘る所を右

の謀よりてあるまじきらいせなん事まかるべしと申ければ　東照宮尤なりと深く信じたまいせなり

○東照宮の御女を北條氏直迎へて兩國和平なれども御對面なかりしに一ぬば天正十四年三月使ともて拜謁して要害國境の城々守の兵と輟いべし黄瀬川を渡り伊豆より至るべきかと仰遣されしよ酒井忠次黄瀬川と越氏政父子よ御對面いひなば北條家に旗下ゐ屬しいと同一事よていい今德川家は五州の御主也爭か北條家の旗下に屬そべき德川家の瑕ありと諫先申そ　東照宮さをば其位爭ひ無益の事なり過し頃武田上杉和平ゑて犀川と隔て對面の時馬より早く下りたる方旗下よ似たりとて忽ち事破れ其場より鉄炮を打合諸卒血よ染て相引よゑたるきその時信玄廿七才謙信十八才の時なり夫より和平して京とさして上らんゐ信長も吾も爭か支へ得べき其故に兩方に使と以て道理至極せりといはせしかば兩將廿四年に間和平せざりき其中よ信長い近江和泉と打從へ吾も援と出して信長と後ゐして根と深くそるの謀をせしが信玄死して勝頼父よ優るべきと威と恐るひ暴逆にして滅亡したり信長又勝頼よ勝りて驕長じ樣々よりふぬ事のを有て終よ弑せられぬ斯の如き大將い滅て終とよくせざるとと理也夫と見て戒とせず位爭ひとするい惡き事なり氏政吾と二心なく言りはさんゐ兩旗よて東國と打平げなん其時よ及で州あまた領そる者上座に在ん位爭ひ更よ益なき事也とて伊豆の三島にて氏政氏直に御對面あり

○信長弓箭盛よして畿内と打從ゑられし頃近習の者共詔て剛強大よ及ばせたまふ事と知らで平手中務が自害しけるい短慮よていと申けると信長怒て色と變じ吾斯弓箭と取事みな中務が諫めて死けるよ耻悔て過と改めゑ故あり古今よ倒なゑ中務と短慮なりといゐ汝等が志無下よ口惜き事也と言れけり

小瀬甫菴後よ此事と傳聞て信長記と編ざる已前なりば必其中よ書

入べたゝ遅くきゝて殘多ーと言けると也中務大輔政秀ハ備後守より信長ヒ傅に附ふれたり信長甚よろらぬ事多かりしかゞ度々諫爭て後國の亡ん事と料りり〻一封の書と留置て自害して失たる事世よ普く知たるば具に記さず中務始ハ清秀といひける故諸書よハこな清秀と記したれども後ハ政秀と改たける故諫死の後信長尾州名護屋に一寺と建られ政秀寺と稱し寺領二百石寄附せられ臨濟開山派京都妙心寺ヒ末寺よて中務の墓も其寺よ有寺の緣起に政秀葬送の時信長棺よ手と懸ふれたるよし記せり小瀨甫菴ハ町醫にて加州金澤ハ居利家ヒ臣横山山城守長知のもとよ心安く常に來て毎夜伽ゝ玄けり長知ハ尾州ヒ入よて織田家の事能覺えたりし故信長の事甫菴毎夜尋問且秀吉のおとゝも問々る故長知或は委〻或はおろ〻語り聞せけると甫菴退て書記し信長記太閤記二部の書を著し世上へ出玄けると長知聞て信長太閤の事と書記さんためよ尋問たらんにハ答ん樣の有べたゝ遺漏も多く殘多き事也其事と聊も知せざるハ依て只一座の物語よいひたかせたるを其儘に書著たるハ今よ於て甚遺憾なり甫菴馬鹿者なゝと長知いひしと也長知ハ初浪人にて敵山よ寄宿玄諸國を武者修行して後與田家に仕へ大膳といふ加州大聖寺小松越中末森なゝの軍ハ武功ありて一万五千石領し其後同州太田但馬守と放討よせよとの命と受け太田の祿一万五千石と合せて三万石與へらる長知大功の人ハて人の勇武とさのゝ目ハ揭ず大方の事ハ稱美もせず只武士の有べき事と心得たゝし故甫菴よ語りける事遺漏多くて悔ゝけるとゝ

○信玄死れー事と深く隱したるよ北條氏政泄聞て謙信の元よ告やゝれけゝ謙信ハ春日山にて湯漬飯を食せられしが是とゝ〻打驚きて箸と捨飯を吐出ー英雄とは此人なり關東の弓筈柱を失ひたりとて惜まれけゝ信玄ハ將略ヒ謙信よ及ゝざる故よ高野の成慶院にて大威德明

王の法を修し謙信を呪詛せられし其文今は高野山に傳わりけるといふ

信玄勇才い人に超たりと稱そべ玄父を逐ひ子を殺し降將を殺して其子と妾と玄其餘不仁怨毒算を尽すべからず姑く此二事を併見ても二將の賢否論とまたずして明なりまた甲陽軍鑑は記せし處附會詐僞玄ひて拵を設けて信玄の惡を隱し他を蔑はせし事是又のぞへ尽そべからず一事を舉て論ずるは北條家と戰ふとに利有と見えたれども北條五代記は記せるを信玄川中島は陣せしは氏康夜討して甲州の兵敗北し八幡と書たる旗を捨て甲州へ逃入たりと見えたり甲陽軍鑑は是を忌て津浪は旗を取られしと記したりたとへ北條五代記の說誤りたりといふとも津浪は旗を取ふれ玄い陣所れ地理はくふたはあらずや

○甲陽軍鑑と高坂彈正書たりと世に傳はる事久し勝頼に仕へし友野大膳武功の人にて甲州れ滅て後引おもり隱れ居しが書たる物は香坂と記せり姓も違ゐり僞妄多き書なりといへども軍國の事情をよく書取たる故は其臆妄と人疑いを控弦の家專讀べたものと古人もいひし也然れども其事實を案じろれ眞僞を考へずは大は惑わされん事必然也川中島九月十日の合戰の事其記せしよりて是を論ずるは信玄の敗北たる事疑ふべからず卯の刻は始りたるは越後方の勝己の刻は始りたるい甲州の勝なりと記せり軍い芝居を蹈へたる方を以て勝とそる事甲陽軍鑑に論明白なり然をども其日れ戰信玄芝居を蹈へふれしとをい踏べうふず既は山本勘介か其軍を豫ねいひたりしは二万の兵を一万二千謙信の陣西條山へ指向け合戰を始めなば越後の軍勝とも負るとも川を越退ん所を旗本組二陣を以て首尾を打んと謀りし也然れば謙信客戰なるが故にれもふ程利を得たりとも越後は引返そは極りたる事なり是主戰れ敵に勝たればとて空しく其地は有べきにあらざると以て也是を以ていへば信玄芝居を蹈たればとて勝とい

ふべからず是一ッ又信玄芝居を蹈べたりとも言ひがたきよや甘糟近江守犀川と渡りて三日留りたると甲州よりも押寄て軍をる事あたわざりきあれ越後の軍芝居と蹈へたるにあらずや是二ッ昔老人の物語に言傳へし事あり信玄嫡子義信と殺されしい繼母れ讒言あり一といへども其實は川中島よて信玄義信將机換りとして信玄い廣瀬の方へ引退く敗軍といひながら義信を捨殺そべき勢なりし故義信深く恨をと踏くむと以て終に不和に及んで殺され玄に至れりと也信玄其場と踏と能いず玄て逃たるを以て芝居と踏たりといふべたや是三ッ謙信素より甘糟ともて川と渡るの後殿と定玄られ玄が三日留りたると以て見れば年陽軍鑑よ甘糟ら兵散乱せしと記せるも虛妄なる事論と待す甘糟三日芝居と踏たるお謙信何事よ狼狽玄て主從二人高梨山よかゝりて走るべきや謙信既に其前夜軍評定あり玄に計りし如くなる旨甲陽軍鑑よ記せ玄所明なり初の合戰ふ打勝ニ巳刻まで徒に敵の歸り來ると待て敗走そべたや謙信の弓矢ととれる越中の戰ひい父の吊合戰なり信濃よ師と出そい村上義清よ頼まれて其求よ應じて是と救ふ也相摸れ軍い上杉憲政の來ると容て巳事を得ざる也故に其詞にも強て勝敗を見るにあらそ當る所のなさで叶はざるの戰ひをなそと云り信義と守ると大將の慎むべたる事にせり爰と以て深く頼みたるい始終約とかへす又其兵を用ゆる信玄の及ぶべきよにあらず山の根れ城と攻落せ玄に信玄氏康兩旗よて後援すると能いず遙々と敵の中を旅行して京都よ趣きたるも勝れたる事ならずや信玄い謙信小田原へ攻入たる跡よ付てなしたるいなし安きにあらずや甲陽軍鑑よ長沼に城と築れし時判兵庫よ信州水内郡にて百貫の地と與へ信州戸隱よて密供と修す爰に北越の輝虎讒臣と企て此次れて見えずとしるせり永祿十一年謙信戸隱山よて謙信を信玄呪詛直筆の書と見て打笑ひ弓矢取る身の耻也末代の寶物にせよと神職にいはれし由語傳ふいま其書紀州高

野山に有とい為事詳に書記せる物なり實い謙信と恐るゝ事虎れ如しともいふべたよや村上義清再び信州よ歸り入しと甲陽軍鑑よ載ずといをども永祿年中信州の中四郡謙信わ屬し義清と信州へ入ふれしと記せるものあり甲陽軍鑑に長坂長閑跡部大炊助二人と奸曲の臣として勝頼寵せられ玄事と深く憤れるいさるとなれども二人權と取るい勝頼よ始をるにあらず信玄の時より寵せられし故勝頼よ至て愈權威有き信玄の時北條の兵に跡部敗れ走りしと皆寵愛と憎みし由と甲陽軍鑑よ載せたると以て知るべき也又言傳をし説よ甲陽軍鑑と著せ一本意い彈正ふて筆取い猿樂彦十郎といふ者なり彦十郎い甲州滅て後大久保忠隣れ所ふて　東照宮れ御事とかきくゝへて一書となしたると也又或人の云しい川中島合戰の事と前夜に論じて謙信强敵たるの故對々の人數よてさへ危ふれよまして信玄八千謙信一萬三千なり勝といふとも討死ふまたあるべし武田の各存るい理なりといひしとを甲陽軍鑑よ載たれば勝い謙信よふる事分明なりと論せし人も有き又同書よ載たる持氏生害兩上杉やあり恣ふて武州河越にて北條よ負たるは天の罰なりといへり持氏と兩上杉と時替れり持氏の滅亡い永享十一年にて氏康とい遙に百八年と隔たるを同時よ記せり北條早雲は延德二年に相摸ふ打入たり其頃上杉顯定は越後よふり顯定い越後信濃の境長森原よて高梨よ討れぬ早雲さを兩上杉と斯の如きと氏康未だ生れざる已前の事共と甲陽軍鑑よ記せ一事誤なり天文六年丁酉七月十五日管領朝定と北條氏綱と武州川越よて夜軍ふり朝定討死也此合戰と兩上杉と氏康夜軍となして記せるよや同十五年丙午四月廿日持氏五代の後古河の晴氏と管領上杉憲政と共よ川越にて氏康と合戰有て晴氏憲政敗北なり是を甲陽軍鑑に兩上杉と氏康軍とせりされば五代已前れ持氏とば公方と記し五代已後の管領と兩上杉となせる也持氏四男成氏成氏の長兄公方政氏也同人の長子高基高基の長男晴

氏ながといへり又甲陽軍鑑に載る高名の事ども盧安多し中に就て再拜を手に懸て在し敵と討取て首と得し事と記せし事幾ばくといふまとと知す惣じて甲州に敵せし士い再拜と手にかけしと見ゆ誠に笑ふべき書の記ざま也其餘盧安勝て計ふべうふず然れども其時に居て戰國の勢ひと能知り且士の情に達せし者の書たる書なる故弓矢取者の翫ぶべき書にて盧安とさみして棄べきにはあらず

吾共の松崎惟時が語りけるい其師なりし寶山流の劔術に達人武藤十右工門の論せしに戰にい巧拙有と覺ゆ太閤秀吉い戰にい拙き也小牧にて十万に及ぶ兵と帥ゐて　東照宮に對陣し誠に一又も合そる事能はず東照宮の御弓矢世に勝れさせたまへるい論にや及ぶ然れども笠形原にて甲州の兵と御一戰ありしに衆寡敵しがたき故に や利と失はせたまひぬさらば信玄い海内無双ともいふべきに謙信と軍そる度ごとに打負られたり是をもてかもふに戰ひの巧拙い遙に其科有にやさかれども天下に旗と揚世と治先國と平かゐそるの道い別に有て戰ひの巧拙にいよるべからずと語りしとぞ是又奇論とすべし

常山紀談卷之七終

常山紀談卷之八目次

一仙石權兵衛九州ゟ問者の事
一島津家久島原合戰の事附惠藤某が事
一立花道雪行狀の事、
一道雪仁愛深かりし事
一立花道雪高橋紹運猫尾城の寄手ゟ加へる事
附道雪死去の事
一稻葉一徹罪人と免さるゝ事
一高橋紹運討死の事附立花統增薩摩ゟ囚るゝ事
一紹運齋藤鎮實の妹と娶られし事
一志賀親次山海が嶺ゟ兵と伏る事
一高畑三河功名の事
一齋藤親正討死辭世の事

一薩摩勢横目の砦を攻る事
一巖石城合戰坂小坂先登の事
一野矢甚右工門功名の事
一秋月種長降參の事
一新納武藏守豪氣の事

常山紀談卷之八

備前國　湯淺新兵衛元禎輯錄

○秀吉島津を討んとおもひ事年久し天正十三年仙石權兵衛と商人の体よそおて間者とし山々浦々の地理悉く繪に書て起臥より見兵と分ち攻入べき道々を計らをけり

○島津中務大輔家久肥前より攻入島原の城を攻落したる所より龍造寺隆信大軍よて押寄たり家久をづかより三千計なりしと幾重ともなく取圍む家久是を物ともせず明日は合戰吾先陣をべし貝と相圖より切りくるべしと定て夜の明るを待つ朝霧深く物の色も分たず家久將机より倚てそれ間を待りやうに朝日出て晴わたりしより子の又七郎豐久十五歳よなりけると近付天晴武者振よ只上帶の結びかくるもれぞとて結直さ脇指と抽てその端を切て後よく聞け若軍よ打勝て討死せずば此上帶我解べしけふの軍よ屍を戰場よさらさんより島津が家より生をたる者の思ひ

切たりと敵もしり我も黄泉よ悦ん物とといひもあへず貝吹立させ眞先に隆信の旗本へ切てかゝる島津家の弓箭い先駈の兵い矢一筋持せ射放ちて弓と捨長ひ刀を抽て切てかゝるけふも又去かーたりけり隆信は旗本乱れ立敗北すれば隆信ひたなし返せと下知し遂よ蹈止り討死せられけり家久勝てほこふず人數とまと先陣と整へゝる所よ龍造寺の臣惠藤ろれがし首一ッ血に染たる刀に持添大將は何國におそしましいぞ功名の印のいと言て家久よ近付寄り首を投捨て馬の上なる家久と一太刀斬たりーに家久心疾く馬より飛下りたれば左の草摺と切て餘る刀膝よあたりけり惠藤と中に取まめて討んとそれば家久あたら者と討なと下知しければ生捕んとそれども素よりけ臆と最後とかもひ定ひ切て廻ひ去ほどよ終よ討れけり惠藤とのみいひて名とば名乗ず家久惠藤が首と膝の上に置並びなひ剛の者義勇の士とい是ところ言べけれ生捕て對面し龍造寺に送り返さんと思ひーよ思ひ切たる戰死せふれしかは力及はずとて近所ひ僧と請じ惠藤が吊ひの事念比に沙汰し其有樣詳よ記ーて其僧よ賴み故郷よやられけり偖豐久を呼て今朝の約のとく上帶と解たりしとかや家久い島津家の大將也豐久後又中務と稱ーたり闘ヶ原よ於て義弘の身に代り討死あり去は此人也

○立花道雪い

始め戸次といふ立花の跡と嗣ーー故立花と稱そ始の名い鑑連男子なく高橋紹運の子と養ひて嗣とそ

若かりし時雷よ震れ足痿歩行心に任せず常よ平輿よ乘累代大友家よ屬ひ大友家衰へゝをども道雪心と變せず武勇遇しき人よて士卒と見る事子と愛そるが如ー戰ひに臨む時い二尺七寸有ゝる刀と種ヶ島の鉄炮と手輿よ入三尺はかりの棒ゐ腕貫として平よ提げ乘られ長き刀捕たる若ひ士百餘人手輿の左右に引具ー軍始れは手輿と此士にがゝ壮棒を取り手輿とたゝひえいどうと聲とあげ此輿と敵の眞中よかき

太はとて柏子取遲く時は興の前後とたふかれけるゑ敵ゑ北だるゑ
も耻として面もふらずかく入ければ手興の左右の士三尺餘りの刀と
ぬき連て一文字に切てかゝりけるゑ先陣の者どもそいや例れ者頭ゑ
といひもわへず我先ゑと競ひろゝりいかなる堅陣とも切崩さずと云
事なし若先陣退立ふるゝ時い道雪大音上て我と敵れ中へ舁入ゑ命惜
くい其のち逃ゑと眼と見出し下知せふれしほどふ守返して勝ざる事
なき斯れば道雪の士は一日に幾度鎗と合せたるといふ者多ー又道雪
常ゑ士ゑよわく者いなくもの也若ゑよわく者あらは其人の惡きにいあ
らで其大將の勵さゞるれ罪也吾士いい臨ふや及ぶ下部ゑ至ても度々
功名なきい仰ふず他の家ゑて後たる士あふば吾方ゑ來る仕るゑ取か
ひて遇物にせん吾士の四月朔日左三兵衛は若き時初て後れー事れ有
去ふいつの頃よりか血臭く事にあひて次第に物ふ慣れ今い五六人の
剛の者と世ふいいるゝぞかしとてたま〳〵武功なき士のなれば明塞

きれ有い武功の事ゑ弱からざるい我見定めたり明日ゑも軍ゑ出んゑ
人にそゞろされ必ず拔懸して討死したまふな夫い不忠也身と全ふ
して道雪と見つきたまはれ各と打連たればこそ斯年老たる身の敵の
眞中に有てひるゝたる色と見せざるぞといと懇ゑ睦去くいひて酒酌
かい〳〵其比いやりける武具取出去て與るられければ是に勵されて重
て軍のあふん時必ず人ゑ後れじと勇ゝて聊も武者ぶりの能見ゆれば
呼出去てあれ人々見ひへ此道雪が見去所に違臨べきゑならずとて勝
たる剛の者の名と呼て頼ゝひほどふ能引廻去てよといひ又人々の心
と合せふるゝ事此道雪い天の冥加に叶ひたる事ゑと勇先立若わかき
士の席上ふて心得違たるの事ある時い客の前などゑ呼出ー打笑ひ道
雪が士ふけゝかゑころなれされども軍ゑ臨て火花と散しひ鎗い此人
々社能それとて鎗追取たるま称して譽ふれしうば人々感じ涙を流去

○道雪の傳に仕ふる女心ざかよ思ふ者ありけるとぞ有ける是を去るもの有てある夜物語の時申けるゝ東國の大將ゝ誰とゝ去らずゝ寵愛の女に密ゝ情と通はゞ者のゝひゝと誘せられきとあふぬ事と態といひて道雪の答を試さけり道雪打笑ひ若きもの〻色ゝ迷ひたるゝ必しも誘せずとも有なん人の上ゝ居て君と仰がれんには仮初の事ゝ人と殺せば人背もとゝゝ國の大法と犯去たるゝゝ異なりとぞ語ふれゝる彼者傳へ聞て心ゝ慙又道雪れ仁愛に感ず其後薩摩の軍鎧が嶽の城と攻る時道雪と出て戰ひ去ゝ大軍押かゝり危かりしゝ彼者大音上乱ける味方と耻し先て散々に戰ひける其ひまに道雪城ちゝく引取たるゝ敵猶きぴ去く進を來て城門とたてあへぬばかり也ければかの者又取て返し武士の討死そべた所は爰にあり各是にて討死せば城をば敵に奪れれじ返せや人々といふまゝに鎗と横たへ折敷ければ返し合とる者三人あり面も脇らず戰ひて討死しける間ゝ城門と閉たゞけり

○天正十二年大友宗麟猫尾れ城と圍て數十日攻れども落ず大友の兵長陣に氣疲をたりと立花道雪高橋紹運聞て宗麟ゝ馳加ゝり然るべゝと相謀り俄に兵と出し二夜の腰兵粮を付ゝと陣觸ゝて八月十八日打立たり士卒是ゝ何方を向ゝるゝゝやと怪ゝなゝがら下知ゝ從ひて三笠郡内山江原へ打上る是より黒木の猫尾へおし行べしと下知し紹運先陣たり今宵ゝはや夜半過たり月傾ぬ筑後川の邊にて夜ゝ明なん然ふば敵の中數十里押通る事いかゞ侘らんと紹運の從士言ければ道雪へかくと云送らるゝに道雪色とゝへあれ早く夜の明ゝかゝ見晴去て敵出ば撫切にして通るべ去とて乘物と叩かれゝかば使者ゝ行ける萩尾大學ゝしなき使として耻辱ゝ逢たるぞとて馳歸る紹運の從卒の謀しごとく筑後川へ押着れば夜明けり渡る處ゝかたの瀬といゐり瀬蹈ゝも及ず混々と打入おし渡る秋月種實の士芥川兵庫といゐ者五十騎ばかり星野城より番代りて歸りけるが何方より誰の軍をおさせられゝやと

問紹運餘そなと下知し取卷て一人も殘さず討取首と高所に並べ軍陣の血祭したりとて夫より石垣原迫れし出し後陣と待揃へ耳納山と越んとする所に秋月種實筑紫廣門の兵共所々方々より兵と出さるのりまりゐさまれ切所に待かけ鉄炮と打かくる事數とーらず中にも大木を小楯にーて其陰より顔計出ーて鉄炮と搏者あり殊に平だれにて負數多に及べり道雪の乘物舁たる人にも中りて倒れーゐば乘物といたと落しぬ道雪怒てあれとうてと下知して傍より頻りに鉄炮と搏かけけれども面ばかりさきのぞきて鉄炮と打出せば彼らぬべた透間なくて中〳〵あたらざるしゐば道雪いかに紹運の士に手だれいおいさぬかあれ討せ給へと詞とかくれば紹運市川平兵衛と云ふ士に命せらけり平兵衛承いといふて鉄炮と搏て待所に又ゐの木陰より面とさし出ーければ市川手き〳〵早に搏たりしに眉間に中り輔び出てうりぶしに倒れ死る敵前後より取挾ければ後陣の由井雪加より道雪に使と以て唯今討死と遂べきと申送ると聞て紹運大返さに返さずば味方の後陣危くて此切所と越がたかるべきとて取て返さ敵を拂て耳納山に押上たりしかばいや夕日に及べり諸卒はるくと拂來りさかば疲を休先に今雪い爰に陣すべーとて曠原に折敷せたり俄に雨降來れども兩將打廻りて士卒に詞をかけいたいらるゐに本より兩將の恩惠になつた服したる者共なればちりとも疲れと覺えざりさとぞ斯て一夜はそこに陣し明の夜黒木に押付られしかば豐後の兵競ひあへり宗麟も兩將の奉勳鬼神のごと成べしと崇敬ー諸卒に及ぶまでもでなーせふれりされども宗麟にい人々れもひ放れたりし故田原親家も俄に心替ーて兵を引具さて豐後に歸けばかもひ〳〵にて事ゐうず宗麟も引返されしゐば兩將も高良山に陣して其年も暮ぬ明る天正十三年の夏に及びければ押がへそべしとて紹運い赤司に屯とうへ道雪い北野村天神に壇に移ふれさに病付て次第に重くなりさかば吾死したらば屍に甲冑と着せ高良山の好巳の岳に

柳川の方へ向て埋むべし此事背ひなば我魂魄必ず祟となすべしと遺言して九月十一日七十二歳にて終られけり斯して此よし十時攝津守と便とにて立花の城よりも統虎よりくと申を尸骸を只一人棄置ん事人の誹も免がたし立花へ歸し入べき旨答へらる十時陣所に歸り此由といへば由井雪加されば仰の趣い不可なるに非れども遺言の重ければ背きがたし雪加先腹を切り御供よ恭るべしといひけるば由井大炊某も腹と切右脇の御供よ我立べしといるば誰も爭か殘るべきと殉死をべひ人餘多に及べり其時原尻宮内少輔熟々と聞て各達唯名聞を好みなんにい然るべけれども統虎公の御爲よりなんや夫程に存るならば嗣君よも御腹召せたらんまろよからひと荒らかよいひけるば雪加聞て尤よい然る上い我思ひ止るべし棺とば立花へ歸り恭らせいん事然るべき崇のあらんよい雪加が一族罰お蒙るべしとて九月廿四日陣拂にて道雪の棺の供して立花へ引取けり

○稲葉伊豫守一徹下人罪有て死罪に行ふ時聲を上て泣く命をしきやと云ば彼罪人いや〳〵命を惜て泣にあらず命あらば一太刀恨むべきよ斯成果る事の口惜くて泣なりといふと人々惡ひ奴哉とう〳〵斬棄よとひ去めくと伊豫守聞てそれ助よ迎縄と解せいかよもして我よ一太刀打よとて追放ちければ忝よ去再三いひて立去けり其後年經て一徹病重くなるー時彼下人來て力を尽せーよ本意と遂ずとて又泣く頓て一徹死ーて葬の後彼下人一徹れ墓よ詣て吾けふまでながらゑたるい君と一太刀恨を申べーと申せ去が故也君隱れさせたまひーよ生て居たらんよい刑死よ及て泣去い命惜さに泣たる也と人の申さんと耻去くいとて腹搖切て死ーけり是と以て見るに戰國の時上の人下の人其情の太平無爲の化に浴ーたる時の人に異なるとおもひしるべひ也

○島津義久島津國書忠長伊集院右衛門大夫忠棟と大將とーて兵五万と以て筑前岩屋の城主高橋紹運と攻む岩屋い要害ひ地よ拠らず實滿

が嶽に楯籠て防ぐべしといふ者あり紹運てゝと去て寶滿が嶽に入たればとて勝べきおもはらず敵に恐れて逃たりと誹らんも口惜し此城を墓に定めたりとてちりとも顯かず四方と圍て嚴しく攻たりけれども驚く色もなき義久の士大將新納武藏守忠元矢留を乞て城中に申べたとのゝと呼ゝりけるば紹運聞て何とにかゝと問ふ新納申けるは紹運の武勇世に名高しといへども大友家に組せられ亡衰をふれんと近きにあり大友家ゝ切支丹と崇め無道にして復家の興るべたにゝゝず古た詞に一張一弛と申事れゝ疾義久と和平せられゝへといひければ紹運聞て斯申ゝ高橋家にて麻布外記と申者にて候只今承り候冒紹運に申程の事にも候ゝず聊義の當れる所と申べし人々能聞れ候為凡盛衰消長ゝ時の運にて古為の細川畠山赤松山名を始と去て今川武田近國にて尼子大内等一度ゝ盛にて一度ゝ衰為ずといふ事候をず紹運今の限りに成てよも冑と脱て降參せふと存ぜたやや大友の家も右大將賴朝卿の時より子孫國と受傳へぬれど日向の軍に敗しより貳心ゆるもの多出來て今らく衰へたりさをども今にも秀吉公大軍にて九州に渡らせたまひ薩摩に攻入れんに鹿兒島の破れん事も遠からじ勢ひ尽運衰へぬるを見て志と換るは弓矢取身の恥辱にて人に爪彈せらるべし松壽千年終に朽る事ぞかゝ人生は朝露の日影を待が如し只永く世に殘ふんものは義名ふ在と覺えゝ程に降參は仕らじと高聲に呼はりゝれば新納も又いふとなかりけり外記とゝ名のりけれども紹運ならでゝるる詞だにかひせん人やゆるると言ひゆえりかくて猶降參とそゝ先て莊嚴寺の僧を使ふ！けれども聞入ずさらば攻よとて天正十四年七月廿七日四方より押寄聞の聲と作りかけえい〳〵聲と出して攻たりけり城中にゝ思ひ設けたるとなれば爰と限りに防ぎけれども終に打破られけり三原紹心ゝうり太刀のか弥のひゞきゝ久かたの天津雲ふも聞為ぐべた

と一首の歌と塀の柱に書殘して討死そ弓削平内ゝ强弓の手利なり矢倉に

あがりさし詰引り先箭種を惜まず射伏けるが左の手ゑ痛手と負敵の中ゑりけ入て討れたり高橋越前守伊部九藏も聞ゆる弓の手だをゑて物具のさいやかなる敵と目ゑうろてあまた射倒し矢種盡ければ太刀の切先と揃へて討て出散々ゑ戰ひ一足も引ず討死しゝり尾山中務が子太郎次郎十六才なるが父と一所ゐ死んとて出けるを母袖と扣へけるゑ振切て敵の中へかけ入討死しけり其片袖母れ手ゑ殘けるを也寄手も討れ一屍に四方の谷を埋をぬ既ゑ城兵殘り少くなりしかば何しゑ猶豫すべきとて討て出とめ死叫んで戰ひけるが最期れ軍よも人に笑はれじいざとて或い腹と切り或い敵と引組で刺違へ枕と並べて討死を紹運は江淵石工門大夫三浦式部黒岩隼人ゐ女童共皆刺殺して敵の手ゐな慝そと下知し薙刀打振薙で廻られ玄が今れ是迄也とて和歌と門の扉ゑとゞめられけり

うば弥とば岩屋の苔ゑ埋みてぞ雲ゐの空ゑ名ゝとゞむべき

一說 ながれての末の世遠く埋れぬ名とやいい屋れ苔れした水うくて行年三十九歳にて自害玄て失られけり士卒とあれを深く義厚かりゝ玄うば救もあき城と守りて千八百人の士卒一人も逃散者なかりしい倒少き事也紹運始い鎮種と申けり

一說ゑ城中の婦人い悉く圍るゝに先だちて寶滿が嶽ゑ入れらを一故害にあいすといゐり又紹運薩摩の軍と見渡したるに焉煙黑く押來る紹運人々ゑ向ひ今押來る敵六十巳下廿才巳上の者ども なるべ一今軍ゑ打勝て吾者共ゑとゞとく討死そとも彼敵兵も又三四十年と過ずして野原の白骨となるべし人生は朝露の日影待がごとし義名と萬世ゑ殘しなん事武士の本意なりといいれしかば城兵勇氣十倍せし勢ひと透さず一陣ゑ成て薩兵と切崩し一人も殘らず討死そともいへり又寄手の大將と島津家久なりともいへり紹運の物具の引合ゑ一封の書あり島津中務殿と書たれば家久是と讀ゑ今度降參を勸らるゝの諫ゑ從は

す是義の故あり別よ一封の書と大友よ送り屈々たまいりけへと也中務類ひ稀なる勇將と殺ーけるよ此人と友とせばいかばかり嬉しからんよ惜き事よ弓箭とる身ほど恨発ーきもれはなしとて僧と供養し葬禮と執行ひ壇と築きて家久香と燒再拜去けをば義と感ずるの國風よて薩摩武者皆燒香して涙を流ー紹運と稱美ーけるといあり又一說よ

天正十四年六月島津圖書頭伊集院右工門大夫兩先陣よて筑後國高良山よ押入島津義久同兵庫頭義弘い肥後八代よ旗本と陣し所々と燒働を筑紫廣門の方よい兼て懈りて有ーうば俄よ騷き立防戰の備そへきに樣もなき七月七日薩州の軍筑後川と渉り其明の日廣門れ館を取圍み廣門と虜りたり同月十三日先陣の兩將太宰府觀世音寺よ着陣を其外龍造寺政家秋月種實を始と去て相加り十萬餘に及べり岩屋の麓筑山横岳二日市太宰府のあたり尺寸も透間なく陣去兩將より莊嚴寺の僧を使として此度太宰府お攻よせいい紹運お對去弓矢取べきよあらずいい

筑紫廣門二心あるにより是と討べき爲にて既ふ廣門と生捕ぬ寶滿が嶽に紹運の質子と置れ候て堅く守らせらを候事謂れなきよ似たりとう〳〵寶滿を渡され候へとぞ云送りける紹運承り候ひぬ素より一言の仰なく押て大軍と以て某が守り候城下と馬蹄よ蹴散され候事弓矢の禮よあらずと申べーー扨統虎も道雪の家を續て立花と稱す紹運も今よ有てい關白秀吉よ屬しいへば寶滿も岩屋も關白の城よていと渡し叅ふそる事存もよらずいとの答を使僧歸て言ければ迎も弱々と城と渡すべき紹運にあらずさらば圍むべしとて諸手口々れ攻手と定先七月十四日より柵をふり矢合を始めたりされども城中堅く守りてひるめる体もなく未申の方尾山中務が持口より鉄炮弩弓ともて城へ攻寄たる寄手よ打うけ數百人打殺去手負い數と去らず或時嶺の手の寄手より矢留と乞て新納瀧人と申者にて候紹運公に申べき事いとい度ば紹運麻布外記と名乘て詞戰ひに及べり瀧人詞と尽し

利害と說大友殿まゐ切支丹の宗門と尊信有て神明佛法を蔑ろにし天道に背かれ玄故人心散々まゐ成滅亡近きにいとく島津まゐ屬せられいやうまゐ申たまゐらんやといふども紹運節義を說て屈服の色なく來春ゐ關白九州へ兵と出さるべく候さらば島津家れ存亡も計るべからず主の盛なる時は忠を致玄衰たる時も操と替ざるを以て弓箭取身の道とそ各たち島津家滅亡の時まゐ臨て躬を隱と謀と廻らさを候へ只今夥玄く目まゐ餘る十萬の士卒も百年の齡と保つべきか斯る心も候ひなんにゐ士の義たる道とまゐ存せらるべけれど荅たて降るべき事ゐ思ひもよらず兩將重ねて莊嚴寺の僧と使と玄て八ケ國の大軍を引受堅固まゐ城と守らるゝ事廿日まゐ及べり紹運公の武勇九州まゐ無双たるべし寶滿立花岩屋ゐ子細いまじ和談と取結び軍を返し圍と卷やぐし申べし然れども十萬の軍兵の覺まてい間人質と一人賜りおんやさらば此後大友島津和談ゐ紹運公の心まゐ有べし事成たらんまゐ其時人質を返し九州一統島津まゐ屬しなん其後中國お押渡り島津家天下に旗を立いべしと云送りしのば紹運許容せず人質と關白か大友家に出さん事れさも有なん秋月種實龍造寺に組し夫より一同に九州の亂まゐ及べり根本の人なれば秋月まゐ腹切せ薩州の兩將より今度の弓箭ゐ京都又豐州へれ還恨お為らず筑紫廣門が反心と糺明せん爲也と神文を書て賜いりいひなば紹運事よく計り候べし然らば此城と以て墓所とそと答られしかば和平も事遂ず遂に七月廿七日まゐ諸軍一同まゐ押寄て卯の刻より軍始て午の刻の終まで寄手大軍入替々々攻たりけるお平負討死いふべうらず去ども死骸を蹈越息ども繼せず攻戰ふけふと限りとおもひ切たる城兵各持口と一足も引ず切死に玄たりゝれば城陷りぬ紹運の左右にゐ名と得たる剛の者共五十人ばかりお討なされたるが後度の勝負とも思ゐどまる今を最期の軍おれば當ると幸ひまゐ向敵に切先と揃へて

討てかゝり一陣二陣を遙の谷底へまくり落さけれは半時ばかりい攻入得ざりけり紹運手負討死の士卒を見免ぐりて死したる者ゝい無二の忠節謝するゝ詞なしと一禮し息の通へる者ゝい自ら氣付の薬を口に入れらるかゝる際お及で軍兵ゝ愛を盡されける有樣數年城を守る度々の軍ゝ功を顯し今度い萬ゝ一ッも運と開くべゝにあらざる大敵の圍ゝあひ士卒一人も落散ざりし類なき事よといひあへり其後紹運薙刀と提思ふ程戰ひて辞世の和歌と扉ゝ書付三十九歳ゝて腹を切ふれしかば寄手攻入て敵ながら斯る大將も又有べゝやゝ士卒一人も降参せず逃散事なゝりしと惜まぬ人ぞなかりける内室を始め刺殺すゝ暇なくてとらいれとなりけれども此く寄手もいたいり養育しけるとぞ統增此時寶滿が嶽に有薩摩の兩將使を以て城を渡されよと云送る統增今年十五歳也城中以ての外軍兵少く防き戰ゝ況事思ひもよらず秀吉の出師を待受べき間去ばふく生延て時を窺ふゝ去かずと相謀り統增を立花ゝ送り届け給いりなんにい和平すべし然ふずい城を枕ゝ切死そべきと答へければ兩將より子細あふしと許諾し神文を書て送りしが俄に約を變じたばかりて立花ゝ送り返さず其後肥後の吉松といふ所に移し番兵を付置たり紹運の内室い筑後の北の關といふ所ゝ移し置偖立花へ使を以て降参せふれんやと云送る統虎實父にてい紹運い關白の爲ゝ自害と遂いひゝ況又紹運の爲に自害を遂べしとく軍兵と寄られゝ此城の切岸お て矢一ッ仕ふんと答へふれけりかゝる處ゝ八代ゝ陣せふきし義久より兩將お下知去秀吉師と出して打向いるゝ由いひ聞らせり疾兵を遣そべしとありければ八月廿四日兩將太宰府と引拂ひぬ統虎陣と押出し高取の城と攻落し城主星野中務大輔兄弟と始め悉く討取それより岩屋ゝ向いるゝ處ゝ立花の内小野理右工門といふる者忍入て火と懸たり去らばあいてさわぎ一支もなく逃落けり秀吉感狀

と賜わり大に稱せふる統虎又密に龍造寺ゑ北れ關ゑ押込られ一毋と奪取たまたらんやと賴まれしゑ龍造寺も薩州と弓箭と取べき志ありーうば心得いんとて堀江覺仙といへる者わ軍兵餘多指添て北れ闕ゑ押寄薩州れ番の者と追ちふし紹運の後室と奪取頓て立花へ送届けたり後室此頃い法名と宗雲といひーとぞうくて薩州にい統增と八代へ移し高津加の法華寺ゑ置て警固の兵に嚴ゑく守らせたれば附添たる者共さま〳〵ゑ謀と廻らせども本國とい遠ざかりぬ謀もそべき術なく日と送りけるに尙心元なくや有けん薩州に移し下堂院と云所ゑ置けり秀吉九州へ渡海し先陣薩州千臺まで進まれゑかば統虎使と以て統增とゐたしたまいふんやと義久の陣へ云送られければ義久子細に及ばゞゑて返し參らそべき由答に及しかば十時攝津守と迎として下堂院わ遣いし付添たる面々も殘なく引取千臺ゐ行道海邊を過ゆるに秀吉の軍兵船と掛並べ居たるが落人と見て餘そなとて小船にのりひた〳〵と陸ゑ上り取圍んとそ十時勝れて賢き者わて邊りわ有ける小船とゆり本船ゑ漕よせ統增なるとと斷りければ大將と覺し兀者船屋形ゑ上り再拜と取て諸卒ゑ下知し靜光ければ虎口と通れて千臺わ着兄統虎の陣に入て對面せられけり此統虎い後ゑ左近將監宗茂とて驍勇無双の大將なり過ゑし天正十年十月六日秋月と道雪紹運宇龍野ゑて軍ありしとき紹運自ら薙刀ととり烈しく戰はれゑ統虎十六歲わて初陣なりし其器量と見て道雪養子ゑーて家と嗣すべ兀とと紹運ゑ乞て吾子にせふきしとぞ

○紹運若き時彌七郎といひし比兄の鑑理齋藤鎭實の妹と彌七郎ゑ妻せられよと約束せられけり其砌豐前中國と軍有て殊ゑ騷しくて迎へ取ゞゑて打過ぬ其後彌七郎鎭實ゑ對面の折ゆふ兄が申かいせし如く迎取べきゑ軍の最中ゑて斯い遲はり候頓て迎ゐ申さんと語られしに鎭實げゑ〳〵申ういせしい忘るべくも候は絲ゞ其後妹い痘瘡と煩ひ

で以ての外よ見ぐるしく成ぬ中々かれが有樣よて見屆らるべきよゆゑ
ゝず今よては恭らせんと叶ひがたきといひし時彌七郎色をかへ夫は
存も寄ざる仰と承りぬるなり齊藤家い先祖大友家よて武勇たくまき
ゝ弓取よておはすれば兄よて候ものゝ迎へ申さんと約束しつる事よ
候夫よ辞退もいまじ我は少しも色を好む心にいはずとて頓て婚禮あ
り其腹よ二人の男子出來よけり此迎へとりし頃紹運二十才に及たり
しとゝや

○島津義久大友を攻め所々よ乱れ入る志賀太郎親次獨義久に降らず
義久松の尾の城よ在て秀吉大軍にて九州に渡らるゝと聞て薩州に引
退く親次大よ悦び嶮岨の地よ兵と伏て打破るべしとて鉄炮れ手利廿
人擇き出き山海が嶽の林に待せけり去かる處ゐ首藤五郎大夫堀八郎
とか聞者此度の撰よ殘りけるを口惜ゝ事よおもひ密に道ゐ隱て薩摩
武者二騎打落してけり扨ゝ伏兵有ぞとい聞程ころあれ大軍林よ入マ

草と分てさがしければ二十人の者ども力なく藥と惜ます散々よ打ち
り退くる者共打殺して引退く親次大息切いで義久をば山海が嶽い越
そまじき物と天れ祐よ逢たる義久なりと言れゝり

○豐後國合志常陸介と大友義鎮攻る時佐伯紀伊守一説よ彈正少弼惟教大將
たり佐伯が士大將高畑三河一日よ十三度の功名あり其後人問て僅に
鎗刀一兩度迫り合ても大よ疲れ息切て小兒にも負べきよ一日よ十三
度の功名いたとひ志い飽まで剛なりとも力も息も續きぬるまろいぶ
かしけれといい聞高畑きゝて打笑ひ別の子細もなき事也我戰場よ打臨
て勿論の事といいひながら死生存亡の間よ於て少去け思案を費そべ
き事な去さる故よ人い騒去くても我い靜也大かたい鎗を合せ太刀と
打ちがへざる已前よ力と出し氣と張ならん是に依て精神草臥疲れた
るならん我敵よ向聞時は我首と敵よとらそるか敵の首と我取か此二
ツの中天命に有と思ひて初い綴きに似たれども打合とき一決して一

鎗の中より勝負わかるゝ故より疲るゝ事なくいん也入ざる處よりて氣と苦しゝざる故幾度事より逢ても胸中安閑なりと答ゑけるとぞ

○同じ城攻より佐伯に属したる森迫一本關三十郎親正首と取又戰ひて討死そる時より十七才也常陸介が從兵山本十郎といふ者其首ととる小鍬形三本菖蒲の冑なり短冊を付たり

命より名よそをーゝれ武士の道にかふべきをちしなければ

常陸助感して其首死屍を高畑が許より送り返しゝり親正は豐後大野郡三重郷の人なり

○天正十五年二月秀吉島津を討るゝ時大和大納言秀長近江中納言秀次八萬餘島津が豐後府内より薩摩ゑ引退く跡を追て乱入り高城戝部の城と取圍み附城五十一ヶ所築きたり中より耳川を越て根白の砦より宮部善祥坊繼潤木下平大夫貞基龜井新十郎廣政鹽屋隱岐守光成福原右馬助直高一萬餘より て守りけり是は島津が後卷を防ん爲也頃ハ四月十七日の朝島津使と根白より たて高城の城と渡すべき士卒と助けたまへり候へと言送りければ宮部五十丁隔たる秀次へ此旨申て後兎角の返答と申さんとて使と返して後斯欺て怠らせ思ひもよらぬ所へ寄べき謀也其用意せよとて人夫千人俄より山々の竹木と伐せ陣の前に深さ二間廣さ三間ばかりのかゝ堀とかまゑ柵木と結びて我も〳〵と物具して待所より物聞わ出したる者ども走歸り敵押寄ひと言も果ぬより義弘一萬六千餘の兵と率ゐ國と揚て攻寄たり宮部木戸口より進出一番鎗と名乘て相戰ふ田中九介其子彦六國友半右工門三村三郎右衛門と始め大剛の兵ども先を爭ひて切て出相戰ふ義弘も義久の子にて素より聞ゆる勇將なり薙刀と提げ眞先かけて只今此城蹈破れ者共と呼はり多勢堀と越冑の鍬と傾け蟻のごとく柵の木より付て引破らんとする時兼て巧みたればひう𢌿の綱と斷て柵と堀れ中へ倒せしかば薩摩武者討るゝ者八百餘人に及へり義弘愈怒て進で屍と蹈越て内の柵より攻よ

せ遂間もなく戰ひけるが内の柵をも打破り十八日の朝三の丸と攻取たり宮部を始め愈死地お入たれば爰を限と防ぎ戰ふ斯りしゝば秀長三萬計よて耳川に打向ひ根白の方を見渡せば薩摩の軍兵雲の如く取卷て鉄炮の音鬨の聲矢叫び相交り天地も動く計也川と渡ふんと進まれけるに尾藤左衛門尉知宣秀長の馬ゝ轡を取て義弘が鋒武田四郎が長篠の掛り口に似たり關白秀吉も叶いせたまふべからずと強て留ければ既よ川へ打入れたる馬と扣て進を得ず藤堂高虎は手勢と率ゐ川と渡を搦手より根白よかけ入り自ら鎗おつとり敵數多突伏て宮部に力と合せけり黒田孝隆同長政も手の者を引分け進を行き道より村上彦右衛門といふ剛の者を遣して唯今秀長六萬の兵よて後卷せられ候と呼ゝらせげれは宮部と始め大に勇を悅べり長政の士栗山後藤川を渉り義弘の陣に切てかゝる秀長の士大將羽田長門守も千計の兵にて黒田父子よ劣らじと鎗を打入攻戰ふ小早川隆景も三千計にて耳川に來る秀長今敵陣にかゝるべきと存れども人々同心せられず如何そべきと問るれども隆景冷笑ひて物をいはずかゝる所に井上伯耆就遠浦兵部宗勝古き背破の物具着て進を出鳥津いけふの客人なり訪來るに出迎はずば弓箭の禮儀に違ふべき軍評定と申事や候と秀長を嘲りけれども進むけしき無りゝれば隆景馬と打入て川と渡り敵の後陣と取切んと進まれければ是より薩摩の軍乱れて敗北しければ義弘の從子三郎忠親蹈止りて討死しけり黒田小早川使を秀長ゝ陣を切りうゝして味方ゝ八万に餘れり鉄炮三千計左右の嶺を取切打立る程ならば義弘と打取ん事掌の中よありと申されけれども知宣かたく留めて追ざりしかば義弘敗軍の士卒を集所々よ火とかゝ引取たり後れたる士卒五十餘人戰ひ疲れたるを生捕て引來る助て歸さんいかよといへば是見られよ生て又歸らじと紙よ書て髻よ結付て候ぞ疾首と刎ふれ候へとて皆殺されよけり薩摩の人の勇氣はろゆゝしけれ秀吉宮部にゝ日本無双

といふ感狀を與へ尾藤い領國讃州と召放されるとかや

○秀吉島津を討るゝ時蒲生氏郷前田利長嚴石の城と攻ふるゝに氏郷の先陣蒲生源左衛門此頃い坂小坂といひけるが眞先ゑ進で假名ゑて いちばんと墨黑に書たる白き吹貫と門の眞中ゑ押立て先きさけんで相戰ふ雨の降如く鉄炮を打出せば吹貫い芭蕉れ秋風に破れたるが如し大音上て一足も引な者共と下知し面も脇らず攻入けるを後陣より是ぞ聞ゆる蒲生が内の士大將小坂といへる大剛の者よと口々ゑぞ譽たりける寺島美濃守此頃い半左工門といひけるが是い黑き吹貫おし立坂ゑ續きたり利長の士松原久兵衛と始とーて先と爭ひ攻入終ゑ城と攻落ーて首四百餘打取たり秀吉氏郷ゑ感狀を與へられ小坂ゑ金鎖十四羽織と賜りぬ

一說ゐ小坂を一番と記せり秀吉坂を賞して刀を與へられけるに坂申けるは一番の賞ゑていへば栗田其一人也栗田い黑き吹貫にていひ坂が吹貫白くて目ゑ立申たるなるべしと讓ければ秀吉愈大に感じ刀と栗田ゑ與へらるとぞいへり

○野矢甚右工門い敵五人討取首五ッ提て氏郷れ前ゑ來る氏郷たやすくも首多く取たるかな如何ゑてと問るゝゑ敵の太刀先左りの腕に當ると存い時射出せば中らぬ矢いなき物也とぞ申ける

○秀吉島津と伐るゝ時秋月種長小熊の城と出て秀吉の陣ゑ至り降恭ーけれど秀吉對面降恭れ禮と受て後更に心おく事なし家ゑ傳いりたる楢柴の茶入とて名高き物有とまそきけわゐれ一目見ばやと問れしゑ種長速に取來りいべしといふ秀吉さらば使と以て取寄よとて秋月の從者を返ゑてかの茶入と取來る秀吉見て聞しゑ優れる物あり家れ實たれども我に得させてんやと懇にいれーらば種長既ゑ冑を脫で恭りい上い何條としむべきやうのいべたと申ゑ秀吉殊ゑ悅ばれ久ーく我陣所ゑ在て軍兵ども怪しみ危ぶむべたよ疾歸れ我を防しい弓矢

取身のならひなり降參の上い吾恨を露も殘らず領地本のとくなるべしといいれまかば種長悅びて馳歸る種長が士卒若秀吉種長を害せらるゝならば秀吉の陣よかけ入切死おせんとれもひ定て居たりけるに歸りて委まく秀吉の詞茶入と乞れし有樣を語りければ皆思ひもよらぬ事よといひ伐るり斯と聞傳へて九州の敵多く戰すまて降參せり

○新納武藏守忠元は島津家の士大將也勇名ともて指と折る時第一なりとて大指武藏と稱しけり義久秀吉お降參のとき新納は肥後の堺泉の城よ伐り一說に大日本國の軍と引受一戰とせずまて降參せんは弓矢の無禮なり疾陣を寄させたまへ一軍して討死仕らんとこそ申送りける秀吉頓て師と城下よ進先らるゝにかの城の路三四里が程い馬の鞍とおろし靭れ紐を解ばかりれ嶮難よて輒く打入がたし武藏守暫く支へて後一說お義久斯と聞て大お驚き疾く降參せよと下知せられしといへり今い是までなり主君既よ降參せし上ま家臣の身として爭かは其心に背んや弓矢の禮義ともてりく申たるおておそれへ日本の軍を城に引受る事士れ一面目よてれとて城と出にけり

一說に島津降參の後鹿兒島の外の城々い壞けべれ由秀吉下知せられまよ新納は城に籠り專ふ防戰れ手段とおし其身も病と稱まて引こもり居たりまお秀吉聞ぬ体よして歸京ありけり其後島津上京し武藏守も供したりまに程經て秀吉何とて新納が城をば壞捨ず合戰の設またるや怪まき事也と問れまよ武藏守人々の答と待ず進み出て仰出されし旨義久下知せしかども承入ずして軍と志し居たるまよ蹈過て通ふせたまひまこそ恐多くれへども恨しく存とれ也其子細い城と開く事も古より其例なれ事よ伐らず只今日本れ主と世よ稱し申れ關白樣はるかよ筑紫の果まで引出し奉り鹿兒島に申請候事い島津が家の譽とや申さん新納の城と破棄ずば惡き奴先蹈潰せとて軍兵と向られんは必定なり其時一戰仕らい關白れ御馬を向

させられたる城なりと末代までも申傳へなんにハ子孫の面目是に過たる事やハべき討て出火花と散し一足も引ず討死したりとも是又武名とや申べき敵ハ矢一筋も射かけず去て城と破捨候事口惜く候ひき新納ハ日向口ハ在て宮部善祥坊と始として先陣の人々ハ迫合たりしハ島津降參のよし告來を引返去候ひぬ島津が兵と以て日本國の大軍と引受始終の勝利と計るべきハハ候ハ彌ども新納肥後口と防ぎたらんにハ地ハ嶮なり關白殿下いかに智謀たくまし去くハは去まし候とも輙く攻入たまハん事ハ思ひもよらざる事也嶺々谷々より種が島の鉄炮を打かけれもひのまゝハ先陣と打なやまし申べきハ今ハ至て殘念なる事ども也と恐るゝ所なく申けると秀吉聞て新納ハ聞及ばたる勇將なりとて大言の咎ハ更ハなかりゝり

常山紀談卷之八終

183
5
279

常山紀談

三、四

183
合 5
279